

大阪市北区

天満本願寺跡発掘調査報告 Ⅲ

1998. 3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市北区

天満本願寺跡発掘調査報告

Ⅲ

1998. 3

財団法人 大阪市文化財協会



調査区全景（近世末の遺構）

大阪市北区

天満本願寺跡発掘調査報告

Ⅲ

1998. 3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

大阪の町は、古来より上町台地とその北の大川(旧淀川)付近を中心として栄えてきた。大川の歴史は遠く古墳時代に開かれた「難波堀江」とよばれる運河までさかのぼれるが、近世大阪の町においてもその重要性はかわらなかったことと思われる。

天正8年(1580)、織田信長との攻防に破れて大坂退去を余儀なくされた本願寺教団は、13年になって、大坂城と城下の町づくりを進めていた豊臣秀吉によびもどされ、大川北岸の天満に土地を与えられた。秀吉は天満の開発のために、多くの人々が参詣した本願寺を利用したと言われている。大蔵省造幣局の敷地は、この天満本願寺の有力な候補地のひとつである。

当協会は大蔵省造幣局の敷地において、初めて発掘調査を行った1994年以来、都合3次にわたる調査を実施し、その成果を『天満本願寺跡発掘調査報告』として刊行してきたところである。本書はそのうちの1996年度分をまとめたもので、上記報告書の第3冊目にあたるが、官舎の建替えに伴う調査と報告はこれでひとまず終息をむかえることとなった。

天満における城下町の様相はまだまだ不明なことが多く、発掘調査は緒に付いたばかりにすぎない。今後とも関係各位のご理解とご鞭撻をお願いする次第である。

最後に、発掘調査の実施と報告書の作成に多大なご協力をいただいた大蔵省造幣局に対し、心からお礼申し上げます。

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 佐治 敬三

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大蔵省造幣局の委託を受け、1996年8～10月に実施した北区天満1丁目1番地の造幣局貯留槽建設工事に伴う発掘調査(TN96-1次)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、造幣局が負担した。
- 一、発掘調査は専門調査役永島暉臣氏(現調査部長)の指揮のもとに積山洋があたり、報告書作成は永島を責任者とし、執筆、編集を積山洋(現調査部企画課主任)が担当した。
- 一、発掘調査や報告書作成では以下の方々のご教示・ご協力を得た。記して深謝の意を表したい(順不同)。
鹿塚隆保氏(奈良国立文化財研究所)、仲野泰裕氏(愛知県陶磁資料館)、成瀬晃司氏・堀内秀樹氏(以上東京大学)、長佐古真也氏(東京都埋蔵文化財センター)、鈴木重治氏(同志社大学)、野上建紀氏(有田町教育委員会)、浦上雅史氏(洲本市教育委員会)
- 一、基準点測量および空中写真測量は株式会社かんこう、遺物の写真撮影は徳永園治氏に委託した。
- 一、遺構名の表記は、塙・櫓(SA)、建物(SB)、溝(SD)、道路(SF)、土壌(SK)、柱穴(SP)、その他(SX)に続けて、層位に対応する3桁の番号を付した。
- 一、調査時の測量には国土平面直角座標値(第Ⅴ系)を用いた。方位は座標北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を示す(本文中ではTPと略称)。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物その他の資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査および遺物の整理作業、報告書の作成には主に以下の調査補助員が参加した。
幸前音伸・田中美登利・迫恵理香・奥坂友子・伊賀毅・岩間俊之・島都子・坂上理恵子・木下衛・酒向淑子・姫路真保・金村史子

目 次

序文

例言

第Ⅰ章	調査にいたる経緯と経過	1
第Ⅱ章	城下町天満の歴史と発掘調査	3
第1節	城下町天満の沿革	3
第2節	造幣局における既往の調査成果	6
第Ⅲ章	調査の結果	11
第1節	層序	11
第2節	豊臣期の遺構と遺物	15
1)	豊臣後期第1段階	15
i)	遺構	15
ii)	遺物	17
2)	豊臣後期第2段階	17
i)	遺構	17
ii)	遺物	17
3)	豊臣後期第3段階	19
i)	遺構	19
ii)	遺物	20
4)	豊臣後期第4段階	21
i)	遺構	21
ii)	遺物	23
5)	豊臣後期第5段階	23
i)	遺構	23
ii)	遺物	26

第3節	徳川期の遺構と遺物	27
1)	徳川期第1段階	27
	i) 遺構	27
	ii) 遺物	29
2)	徳川期第2段階	29
	i) 遺構	30
	ii) 遺物	30
3)	徳川期第3段階	35
	i) 遺構と遺物	35
4)	徳川期第4段階	36
	i) 遺構	36
	ii) 遺物	37
第4節	結語	58
1)	本調査区における遺構の変遷	58
2)	造幣局敷地南部における遺構の変遷	60
	i) 層位の対応関係	60
	ii) 遺構面の変遷	61
参考文献		68

あとがき

索引

英文目次

報告書抄録

原色図版目次

- | | |
|---------------------|---------------|
| 1 各時期の遺構面 全景 | 3 幕末期の落込み出土遺物 |
| 上：豊臣後期～徳川初期の遺構(南から) | 上：各種の陶器 |
| 下：豊臣後期の遺構(西から) | 下：各種の陶器 |
| 2 幕末期の落込み出土遺物 | |
| 上：元文一分判金 | |
| 下：各地産の磁器 | |

図版目次

- | | |
|---------------------------------|-----------------------|
| 1 調査地の景観 | 8 豊臣後期第3段階の遺構 |
| 上：調査地と大阪城・大川(南から) | 上：SX601検出当初(南から) |
| 下：湧水の中での調査風景(東から) | 下：SX601掘下げ中(北から) |
| 2 豊臣期屋敷地造成当初の遺構 | 9 豊臣後期第3段階の遺構 |
| 上：TN93～3次調査区全景(東から) | 上：SX601断割り状態(西から) |
| 下：TN95～3次調査区の石垣と出入り口部
(北東から) | 下：第4d層基底面の遺構検出状態(西から) |
| 3 豊臣後期第1段階の調査 | 10 豊臣後期第4段階の遺構 |
| 上：第6層以下の地層(深掘りトレンチ) | 上：東壁 SX501と第4層の地層断面 |
| 下：第6b層上面の炭・灰の堆積(東から) | 下：北壁 SX501の地層断面 |
| 4 豊臣後期第1～第3段階の遺構 | 11 豊臣後期第4～徳川期第1段階の遺構 |
| 上：第6b層上面 炭・灰からの遺物出土状態 | 上：北東隅 第5b層上面のくぼみ(北から) |
| 下：第6a層上面 全景(東から) | 下：第5a～4c層上面 全景 |
| 5 豊臣後期第2・第3段階の遺構 | 12 豊臣後期第4～徳川期第1段階の遺構 |
| 上：第6a層上面 北半部(北から) | 上：全景(西から) |
| 下：第6a層上面 南半部(北から) | 下：全景(南から) |
| 6 豊臣後期第3段階の遺構 | 13 豊臣後期第5段階の遺構 |
| 上：SA601の南半部(東から) | 上：SK401(西から) |
| 下：SA601の北半部(南から) | 下：SK402(西から) |
| 7 豊臣後期第3段階の遺構 | 14 徳川期の遺構 |
| 上：SA601 SP601(西から) | 上：SE401(南から) |
| 中：SA601 SP602(西から) | 下：北壁 SX301の地層断面 |
| 下：SA601 SP603(西から) | 15 徳川期の遺構 |

- 上：徳川期第3・第4段階 全景
下：徳川期第3・第4段階 全景(西から)
- 16 徳川期の遺構
上：SD402地 検出状態(南から)
下：北壁 SD301の地層断面
- 17 第6層出土遺物
18 第5層出土遺物
19 第4層出土遺物
- 20 第4層出土遺物
21 第3層出土遺物
22 第3層出土遺物
23 第3層出土遺物
24 第3層出土遺物
25 第3層出土遺物 各層出土石製品・土製品他
26 第4層・第6層出土羽口・鉾澤
27 第3層出土土瓦・木製品

挿 図 目 次

Fig. 1 調査地位位置図	1	Fig. 21 徳川期第1段階 遺構実測図	28
Fig. 2 建設計画と調査区的位置	2	Fig. 22 SA402実測図	29
Fig. 3 天満本願寺の推定位置と江戸時代の屋敷 配置復元図	4	Fig. 23 徳川期第1段階 土壌断面実測図	29
Fig. 4 大坂城と城下町の主要調査地点	7	Fig. 24 第4c層及び上面遺構出土遺物実測図	30
Fig. 5 TN93-3次・95-3次調査地 遺構変遷概略図	8	Fig. 25 徳川期第2段階 遺構実測図	31
Fig. 6 第2層出土遺物実測図	11	Fig. 26 第4a層出土遺物実測図(1)	32
Fig. 7 調査区断面実測図	12	Fig. 27 第4a層出土遺物実測図(2)	33
Fig. 8 第6層出土遺物実測図	15	Fig. 28 徳川期第3段階 遺構実測図	34
Fig. 9 豊臣後期第2段階 遺構実測図	16	Fig. 29 徳川期第3段階 各遺構実測図	35
Fig. 10 豊臣後期第3段階 遺構実測図	18	Fig. 30 徳川期第3段階出土遺物実測図	36
Fig. 11 SA601実測図	19	Fig. 31 徳川期第4段階 遺構実測図	36
Fig. 12 SX601実測図	20	Fig. 32 第3層出土遺物実測図(1)	38
Fig. 13 SK602断面実測図	20	Fig. 33 第3層出土遺物実測図(2)	39
Fig. 14 SX601出土遺物実測図	21	Fig. 34 第3層出土遺物実測図(3)	40
Fig. 15 豊臣後期第4・第5段階 遺構実測図	22	Fig. 35 第3層出土遺物実測図(4)	41
Fig. 16 SK501断面図	23	Fig. 36 第3層出土遺物実測図(5)	42
Fig. 17 第5層出土遺物実測図(1)	24	Fig. 37 第3層出土遺物実測図(6)	44
Fig. 18 第5層出土遺物実測図(2)	25	Fig. 38 第3層出土遺物実測図(7)	45
Fig. 19 豊臣後期第5段階 各遺構実測図	25	Fig. 39 第3層出土遺物実測図(8)	46
Fig. 20 第4d層出土遺物実測図	26	Fig. 40 第3層出土遺物実測図(9)	47
		Fig. 41 第3層出土遺物実測図(10)	48
		Fig. 42 第3層出土遺物実測図(11)	49

Fig.43 第3層出土遺物実測図(12)	50	Fig.48 第3層出土遺物実測図(16)	55
Fig.44 第3層出土遺物実測図(13)	51	Fig.49 第3層出土遺物実測図(17)	56
Fig.45 第3層出土遺物実測図(14)	52	Fig.50 遺構面の変遷図(1)	63
Fig.46 第3層出土一分判金	53	Fig.51 遺構面の変遷図(2)	64
Fig.47 第3層出土遺物実測図(15)	54	Fig.52 遺構面の変遷図(3)	65

表 目 次

Tab.1 天満本願寺関係年表	3
-----------------------	---

第I章 調査にいたる経緯と経過

大蔵省造幣局は、明治4年(1871)の造幣寮創業以来、貨幣や勲章などの製造や旧貨の鋳造などを行う大蔵省の機関である(Fig.1)。1993年、造幣局では構内南側の職員宿舍の老朽化に伴って建替を計画した(Fig.2)。大阪市教育委員会文化財保護課は、この地が天正13年(1585)に建立された天満本願寺跡の有力な推定地であることから財団法人大阪市文化財協会に試掘調査を依頼し、その結果、豊臣期の生活面が良好な状態で残っていることが確認された。造幣局では「文化財保護法第57条の6」に基づき、本格的な発掘調査の実施について文化財保護課と協議を重ねた。これを受けて造幣局と当協会の間で委託契約を結び、1994年度建設予定地430㎡について1993年度中に発掘調査を実施することとなった。調査(TN93-3次)の結果、大坂冬の陣(1614年)で焼亡したと推定される大規模な豊臣期の屋敷がみつかり、城下町・天満に対する初の本格的な成果として注目を集めた。これについて当協会は、造幣局との委託契約に基づいて調査成果を「天満本願寺跡発掘調査報告」I(以下、『報告』Iと略称)としてまとめ、1995年2月に刊行した。

その後、TN93-3次調査地の



Fig.1 調査地位図
(国土地理院 1:25,000地形図「大阪東北部」を使用)



Fig.2 建設計画と調査区的位置

南に計画されていた2棟の建設予定地(東棟・南棟)でも一連の遺構が存在する可能性が高いことから、試掘調査を行い、南棟部分では豊臣期の遺構面や包含層が存在しなかったが、東棟部分ではそれが良好に残っていることが確認された。その結果、南棟建設予定地については発掘調査の対象から除き、東棟建設予定地のうちの南端部を除いた約350㎡について、1995年度に当協会が発掘調査(TN95-3次)を担当することになった。その成果についても、引き続いて1996年度に報告書(以下、

「報告」Ⅱと略称)を刊行した。

一方、これら3棟の官舎建設と一体のものとして、地下貯留槽の建設も予定されていたため、1996年6月5日、大阪市教育委員会による試掘調査が実施され、予定地の東半部を中心に豊臣期の盛土(整地層)の存在が確認された。この所見に基づいて実施されたのが、今回報告するTN96-1次調査である。

調査はこれまでと同じく当協会が担当し、約330㎡を対象に1996年8月8日から開始した。調査の前半には、調査区の中央から西半部にかけて、江戸後期の大規模な人工の落込みがみつかったため、その埋立て土の人力掘削が主な作業となった。その過程で、江戸中後期の金貨である元文一分判金の出土をみた。調査の後半には、この落込みによる破壊を免れた調査区の東半部で、江戸時代以前の遺構が順次みつかったが、掘り上げるにしがって、連日著しい湧水のなかでの調査となった。これに加えて、部分的なトレンチによって、工事の掘削深度(TP+0.6m前後まで)以下に整地層や遺構の存在が知られたものの、調査は断念せざるをえないこととなった。調査は10月16日に完了し、翌年度の1997年7月18日より出土遺物の整理作業と報告書作成業務にとりかかった次第である。

第Ⅱ章 城下町天満の歴史と発掘調査

第1節 城下町天満の沿革

都市大阪の発展の直接の出発点は豊臣期における城下町建設にあったことは、ここ10年余で急速に進んだ発掘調査によって明らかになりつつある。それ以前の天満に関わる記録では、天文元年(1532)、本願寺に従って興正寺が天満に寺基を移したという伝えがあり、また『私心記』(本願寺八世門主蓮如の末子である順興寺実従の日記)には天文2年9月16日条に「天満の森」とあり、さらに織田信長と本願寺・三好三人衆などとのいわゆる「石山」合戦では、元亀元年(1570)の戦闘で織田方の陣が「天満森」に置かれたことが知られている。

天正8年(1580)、織田信長との講和によって本願寺は大坂を去り、紀伊鷺森、和泉貝塚

Tab.1 天満本願寺関係年表

天正	8 (1580)	4月	本願寺、大坂を退去
	11 (1583)	9月	豊臣秀吉、大坂城築城に着手
	13 (1585)	4月	秀吉、本願寺に天満移転を命ず
		8月	阿弥陀堂ほか建立に着手
	14 (1586)		顕如ら貝塚から海路天満へ移住
		4月	秀吉、天満寺内の堤防普請を開始
		6月	御影堂の建立に着手
		7月	御影堂上棟式、この時対岸との間で乱闘起こる
	19 (1591)	1月	秀吉、本願寺に京都移転を命ず
		7月	御影堂の移築開始
慶長	6 (1601)	11月	天満御坊建立
	12 (1607)	11月	天満火災、天満橋より東を焼く
	13 (1608)		天満御坊、現天満別院の位置に移転
	19 (1614)	10月	大坂冬の陣、天満・船場を焼く
	20 (1615)	4月	大坂夏の陣
明暦	1 (1655)		この頃までに材木奉行屋敷が置かれる
	3 (1657)		この頃までに幕府材木蔵が置かれる

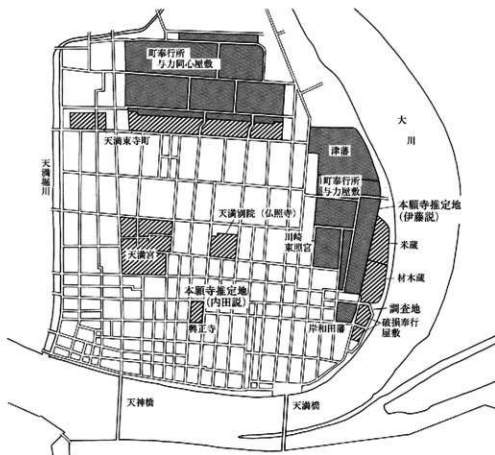


Fig. 3 天満本願寺の推定位置と江戸時代の屋敷配置復元図
(大阪市都市住宅史編集委員会編『まちに住まう—大阪都市住宅史』より)

などを転々とするが、その後、信長の天下統一事業を継いだ豊臣秀吉は天正11年(1583)より大坂城とその城下町の建設に着手し、本願寺を大坂へ呼び戻すこととなった。

天正13年(1585)4月、秀吉は本願寺に対して摂津中島(=天満)に寺地を与え、本願寺側は8月より阿弥陀堂の建設にとりかかった。天満本願寺(中島本願寺)と呼ばれるのはこれである。その位置は未確定だが、大川に面した現在の造幣局付近とする説[伊藤毅1987]と、滝川公園付近[櫻井成廣1970、内田九州男1989]という二説がある(Fig.3)。『報告』Iでは造幣局説のほうが可能性が高いことを述べた[豆谷浩之1995]。

天正19年(1591)正月、秀吉は本願寺に対して、今度は京都への移転を命じ、本願寺はわずか7年で京都堀川へ移ることとなった。その後も天満城下町の整備は進められ、慶長3年(1598)には大川をはさんで東横堀川の北側に天満堀川が開削された。そのころの天満に

は、黒田・織田(信雄)などの大名屋敷も置かれていた。慶長19年(1614)、大坂冬の陣の際に、天満は龍城を決めた豊臣方によって焼き払われた。

慶長20年(1615)、大坂夏の陣で豊臣氏が滅んだのち、徳川幕府は大坂城主として松平忠明を赴任させた。天満における忠明の事業としては、川崎東照宮の建設があげられる。その場所は造幣局西隣の大阪市立滝川小学校の位置である。元和5年(1619)になると忠明は大和郡山に転出し、その後、大坂は幕府直轄領となった。このころから寛永年間(1624～1644)にかけて、天満は大坂三郷に組み込まれた。

天満には町屋以外に多くの武家屋敷が置かれ、寺町の北には大坂町奉行所の与力・同心屋敷、大川沿いには与力屋敷のほか、幕府の材木蔵や材木奉行(のちの破損奉行)屋敷、津藩(藩主家)や岸和田藩(岡部家)の蔵屋敷などがあった。材木蔵の北半分は、寛政元年(1789)に救荒用米を備蓄する米蔵につくりかえられている。調査地はこの材木蔵や材木奉行屋敷があった場所にあたり、材木蔵は明暦元年(1655)から3年までの間に成立したことが指摘されている[豆谷浩之1995]。

天保8年(1837)、元天満与力である大塩平八郎による反乱が、大塩の私塾洗心洞より勃発し、天満地域の多くが焼亡した。慶応4年(1868)には徳川幕府が倒壊し、大川沿いの武家屋敷地は明治政府に接収され、造幣局が建設されるに至る。

第2節 造幣局における既往の調査成果

近世における大阪の考古学では、広域に分布する火災層や大規模な整地層を鍵層にし、これと陶磁器編年を組み合わせる以下のような時期区分を行っており、本報告の記述もこれに則っている。

石山本願寺期(註1)	本願寺創建(明応5年(1496))から本願寺焼亡(天正8年(1580))まで
豊臣前期	大坂城三の丸築造開始(慶長3年(1598))まで
豊臣後期	大坂夏の陣(慶長20年(1615))まで
徳川期	大坂夏の陣以降

大坂城と城下町の発掘調査が本格化するのは1980年代のころ以降である(Fig.4)が、大川より北の天満地域における発掘調査は遅れてはじまり、1993年度の造幣局におけるTN93-3次調査をその嚆矢とする。以後、同地におけるTN95-3次・今回のTN96-1次と続き、その後TN97-1次調査も実施された。このほかの発掘調査としては天神橋北詰の北区天神橋1丁目・菅原町一帯に所在する天神橋遺跡で40㎡を対象に実施したTJ94-4次調査と、ごく最近実施された北区同心2丁目所在の同心町遺跡におけるDC96-1次調査がある。天神橋遺跡の調査では、城下町開発の初期の段階と考えられる豊臣後期の地層や遺構がみついている。同心町遺跡は新発見の遺跡であるが、弥生中期や徳川期の遺構・遺物がみつかったものの、城下町北端の天満寺町よりさらに北の位置であったためか、豊臣期の遺構はみつかっていない。

ここでは過去2回の造幣局における調査成果をまとめておきたい(Fig.5)。

豊臣期の屋敷地造成前

この敷地でみつかったもっとも古い遺物には、中世の遺物群がある。これは各調査の最下層付近から出土したもので、12～13世紀の瓦器碗や東播系片口鉢のほか、龍泉窯系の青磁、丹波焼、備前焼、瀬戸焼などがあり、14～15世紀に降るものもある。ただ、いずれも水成層からの出土であり、中世の遺構に伴うものではない。

検出した遺構で一番古いのは、後述する豊臣前期の屋敷地を造成した盛土の下からみつかったもので、欄や溝、土塀などがある。これらは年代を絞り込む遺物を伴っていないが、欄や溝の方向が天満中心部とは異なり、豊臣期から現代まで続く地割と同じ方向であることから、この地の開発初期の段階とみられ、屋敷地の造成にきわめて近いこととされ



●調査地点 (1997年9月現在)

Fig. 4 大坂城と城下町の主要調査地点(1997年9月現在)

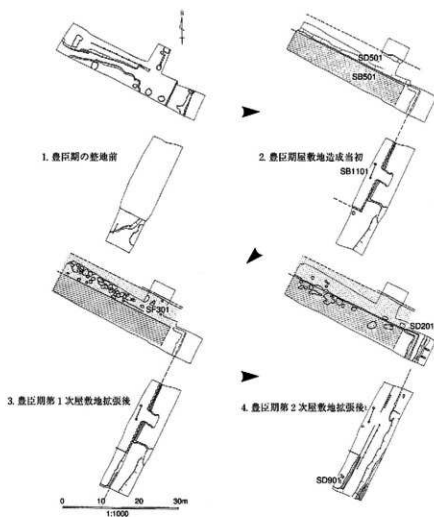


Fig.5 TN93-3次・95-3次調査地遺構変遷概略図

ている。実年代としては天満寺内町の建設が始まる天正13年(1585)よりも遅れる可能性も想定されている。

豊臣前期の屋敷地造成

豊臣前期のある段階に、盛土によって屋敷地が造成される。その当初の姿は以下の通りである。敷地の北辺(TN93-3次調査地)には大きな東西溝SD501(以下、北辺部の遺構番号は『報告』Ⅰより)があり、東辺(TN95-3次調査地)には石垣が築かれ、川側への出入り口と門SB1101(以下、東辺部の遺構番号は『報告』Ⅱより)を備えていた。北辺に沿って屋敷の遮蔽を兼ねた長屋風の細長い建物SB501がつくられ、東辺も雨落ち溝のみからの推測

であるが、門に取付く庇のある塀などが設けられていた可能性がある。石垣は元来は北辺部にも続き、北東角を曲がってSB501とぶつかる約3.5mの間にも存在した可能性がある。

このときの屋敷地の南北幅は35.2mである。東西幅は少なくとも36m以上あり、明暦元年(1655)の「大坂三郷町絵図」に描かれた南北の堤の位置などをもとにした東西幅約55mという推測(『報告』Ⅰの74頁参照)を採ると、その規模は約1,940㎡(約590坪)となる。

屋敷の建設の時期は、先述したように造成前に豊臣期の1段階を想定すると、天満寺内町の建設が始まる天正13年(1585)よりいくらか遅れるが、下限は慶長3年(1598)までの豊臣前期におさまるとみられる。

豊臣後期の敷地拡張

豊臣後期には敷地東辺の南側に盛土して、屋敷地が拡張される(豊臣後期の第1次屋敷地拡張)。これより前か後かははっきりしないが、同じところに、北辺を区画していた溝は埋められ、道路SF301にかわる。この段階の敷地の南北幅は45m以上になり、敷地の広さは約2,480㎡(約750坪)以上となる。さらにのちには、東辺でも大川に向かって幅5～6mの盛土を行い、石垣や出入り口は埋められてしまう(豊臣後期の第2次屋敷地拡張)。こうして大坂冬の陣を迎え、屋敷は豊臣方によって焼亡させられる。

徳川期の敷地拡張

この屋敷が焼亡してしばらくの期間、顕著な遺構はないが、敷地東辺の塀SA851では小規模な柱穴の埋土に焼土が混じっており、冬の陣の焼土層より上から掘込まれたとの推測が可能である。また層位的に焼土層より新しい塀や溝などがあり、冬の陣以後もこの敷地が何らかの形で利用ないし維持されていたことを示すようである。

その後、17世紀中ごろまでには東辺で新たな敷地拡張が行われる(徳川期の第1次屋敷地拡張)。これも東の川へむかって盛土をかさ上げして行なったもので、その東縁部には石を用いた階段や排水路が設けられていた。

18世紀に入ること、東辺にてさらに盛土による敷地の拡張が行われ(徳川期の第2次屋敷地拡張)、敷地の東端は調査区を越えて東へ広がったのである。

(註)

- (1)『報告』Ⅱで述べたように、文献史の側からは「石山本願寺」の名称が同時代の史料にはみられず、その確実な初現が17世紀半ばまで降ることが明確になっている[吉井克信1996]。考古学の時期区分がこれによって左右されることはないが、「石山本願寺期」の名称の適否は、今後、検討を要する課題であろう。

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序(Fig.7)

第1層：現代攪乱層の直下で検出されるプライマリーな地層の最上層を第1層とする。暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト・砂を中心とする整地層で、調査区の西部に部分的にのみ認められた。年代を示す遺物はないが、下位層の出土遺物からみて、造幣局成立以後の近代の地層である。

第2層：調査区西部で認められた明黄褐色(10YR6/6)粗砂である第2a層と、その下位の薄いオリーブ褐色(2.5Y4/3)ないし黒褐色(10YR3/2)の砂混シルトを主体とする第2b層に分かれるが、後者は部分的に分布し、また数枚に細分できた。調査区の南西隅で第2b層内で東西方向の石組みの溝と会所が検出され、これを覆う砂礫層(第2b層)から「御所内大博覧(以下欠失)」の刻印を有する土師器皿1が出土した(Fig.6)。この刻印は主に明治期に各地で開かれた各種博覧会のひとつを示すとみられるため、本層も近代の層準であるといえる。

第3層：調査区の中央から西部にかけての大規模な落込みを埋めていた整地層である。職員宿舍南棟において、1995年10月の試掘調査で認められた深い近世末ごろの地層と一連のものともみられる。本層は10枚以上に細分されるが、いずれも分層線が東から西に傾斜し、かつ生活面も介在しないため、東から連続して行った整地作業の単位を示すものであろう。上半は黒褐色(10YR3/2)系のシルト・シルト混砂などに粘土の少ブロックを含む。下半

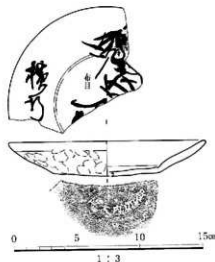


Fig.6 第2層出土遺物実測図

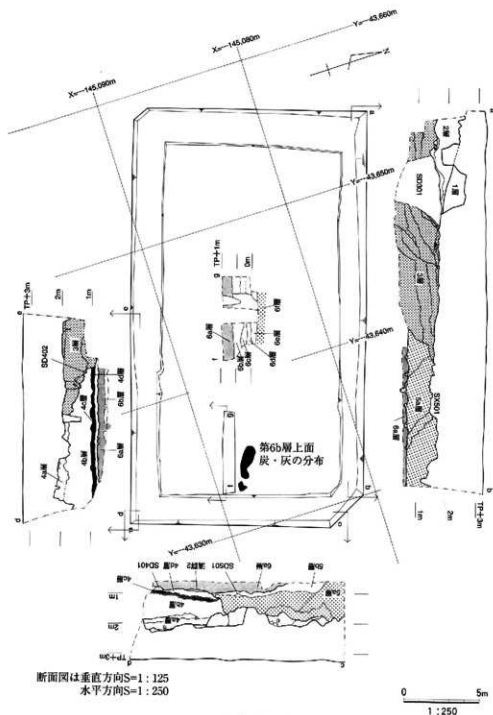


Fig.7 調査区断面実測図

は褐色(10YR4/4)系のシルトや粘土ブロックに砂を含んでいた。東端の落ちぎわでは焼土ブロックも含んでいる。層厚は1.5m以上に及ぶが、この落込みの底は工事の掘削深度(TP+0.6m)よりさらに深く、また湧水も著しかったため、完掘できていない。本層上面から南北方向の溝SD301が掘り込まれている。本層には19世紀代の陶磁器が大量に含まれている。上位の第2b層相当層の年代から察すると、本層は明治4年(1871)の造幣局創設に伴う大規模な土地造成による整地層かとみられる。

第4層：本層は、第3層で埋められた落込みによる破壊を免れた調査区東部に堆積しており、4枚に細分される。第4a層は東部全域に分布する黄褐色(10YR5/4)系のシルト・砂礫を主体とし、17世紀中ごろまでの遺物を含む整地層で、上面は生活面となっている。

『報告』Ⅱの第6層にあたる。第4b層以下は下位層(第5層)が北から南へ落ち込んだ東部の南半分に堆積していた。第4b層はこの落込みを人為的に埋めた層準で、オリーブ褐色(2.5Y4/6)粗砂・浅黄色(2.5Y7/4)シルト・粘土ブロックなどからなる。遺物の傾向は第4a層と同様である。『報告』Ⅱの第6層にあたる。第4c層は、第5層の落込みの下位に堆積した炭灰層で、鉍滓を含む。本層の上面から掘り込まれた井戸には初期の肥前磁器を含んでいる。もっとも下位の第4d層は褐色(10YR4/4)シルトに下位層のブロックを少量含む整地層で、やはり鉍滓を含む。上面は生活面である。豊臣後期かと考えられるが、裏付ける資料数は多くない。なお、本調査区では大坂冬の陣(1614)の焼土層(『報告』Ⅰの第2層、『報告』Ⅱの第8層)は認められなかった。第4c層は後述するように、金属器生産に関わるものである。

第5層：調査区東部の北半にのみ堆積している。高さ約0.8~1.0mの土壇状に造成された整地層である。薄い炭層をはさんで上位の第5a層と下位の第5b層に分かれる。第5a層は6枚以上に細分可能であるが、一連の造成によるとみられる。黄褐色(10YR5/6)系の砂礫を主体とし、粘土・シルトのブロックを多く、あるいは少量含んでいる。遺物には唐津焼が少なからずあり、豊臣後期に属する。第5b層は上面で炭の薄層や溝などの遺構が認められるため、第5a層の盛上が行われるまでに若干の期間、地表面であったらしい。層相はオリーブ褐色(2.5Y4/3)のシルトブロックを主体とし、黄色系のシルト・砂礫などを含んだものである。やはり豊臣後期の地層である。第5a・5b層は『報告』Ⅰの第3層、『報告』Ⅱの第9層にあたる。

第6層：第6a層はにぶい黄褐色(10YR5/4)シルトに砂混シルトを含む整地層で、調査区の東部全域に分布している。本層上面はTP+0.9m前後を測り、2時期の遺構面が検出

された。層厚は最大0.4m程度で、出土遺物には志野焼細片と唐津焼を含み、豊臣後期とみられる。『報告』Ⅰの第4～第3層、『報告』Ⅱの第10層にあたと推測される。これ以下の地層は、工事の深度より下位にあたるため、部分的に掘削したトレンチの断面で確認したものであるが、第6b層も整地層である。オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂礫混シルトに粘土の小ブロックを含んでいる。本層上面は生活面であり、美濃焼折縁皿や青花とともに炭・灰が分布する部分を確認し(Fig.7)、やはり豊臣後期とみられる。ただ、整地された時期が豊臣前期まで遡る可能性は残る。本層には瓦器を含むが、本来はより下層のものであろう。第6c層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)の砂礫混シルト質粘土であり、第6d層はオリーブ褐色(2.5Y4/3)のシルト質粘土である。顕著な出土遺物はない。第6e層は暗褐色(10YR3/3)粘土で、上面には酸化鉄の斑紋が認められた。水田層かもしれない。第6f層は暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土混砂礫である。第6e・6f層は『報告』Ⅰの第6層、『報告』Ⅱの第12層にあたり、中世の層準とみられる。以上から、第6c・6d層に豊臣前期の層準が含まれる可能性があるが、確認するにたる遺物は出土していない。

第2節 豊臣期の遺構と遺物

1) 豊臣後期第1段階

今回の調査区内では確実な豊臣前期の遺構面は確認できず、あったとしても工事の掘削深度より下位であったため、報告は豊臣後期以後となる。

i) 遺構 (図版3・4)

第6b層の上面は豊臣後期と推定されるが、I章で述べたとおり、平面的な調査ができなかったため、全容は不明である。ただ、部分的に炭・灰の顕著な分布(Fig.7)を認めることができ、若干の陶磁器も伴出している。また、南壁および深掘りトレンチによる部分的な断面調査(Fig.7)では、本層上面から掘り込まれた溝状あるいは土膜状の遺構も確認されて

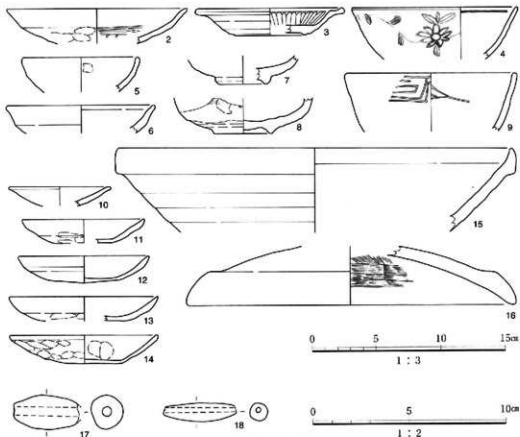


Fig.8 第6層出土遺物実測図

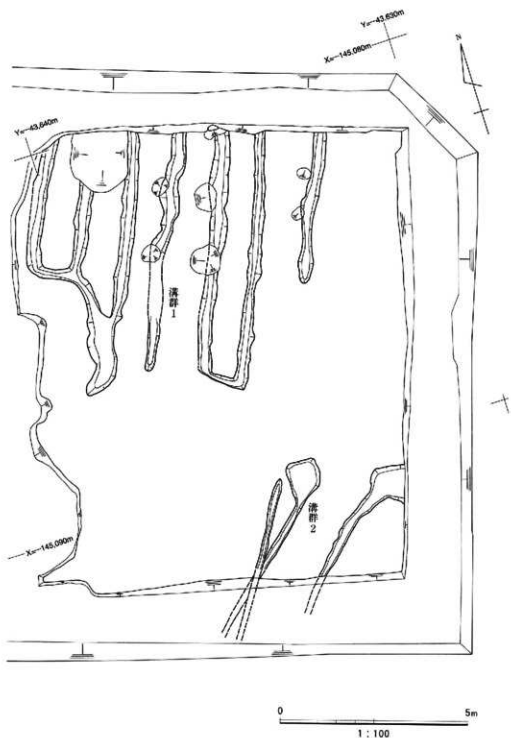


Fig.9 豊後後期第2段階 遺構実測図

いる。これ以後の豊臣後期各段階が、『報告』Ⅰの時期区分でいうところのⅡ-2期にあたる。

ii) 遺物 (Fig.8、図版17)

第6b層から瓦器2が1点出土したが、これは本来、下層に伴うものとみられる。また、美濃焼折縁皿3や粗製の青花碗4が6b層上面で炭・灰とともに出土している。さらにこの面を覆う第6a層からは中世の青磁9や片口鉢15のほか、唐津焼の碗皿類5～8や土師器皿10～14などの出土をみた。以上から古い土器をのぞくと、いずれも豊臣後期の陶磁器・土師器の特徴を有するものである。なお、土鍾17・18も出土している。

2) 豊臣後期第2段階

第6a層上面で検出した遺構面には2時期の遺構群がある。ここでは切合い関係などから古い方の遺構群を報告する。

i) 遺構 (Fig.9、図版4・5)

溝群1

調査区東部の北半にて並行する小溝群を検出した。方向は北で東に20度余り傾き、造幣局の敷地の方向と一致している。このなかには南側で2条また3条がつながったものがある。いずれも幅0.3～0.5m、深さ0.1m程度であり、畑に関わる遺構と思われる。溝とおしの間が畝状の高まりになっていないのは、この遺構面の次段階（塀などが検出される）に削られたためと思われるが、あるいはこれらの溝は耕作時の鋤溝かもしれない。

溝群2

東部の南半で3条の溝がみつかった。ここは上面が第5層で覆われていないため、正確には第4d層基底面の遺構であるが、溝群1と同じく耕作に関わるものとみられるため、一応この段階の遺構としておく。これらは、溝群1より幅・深さともやや小規模で、2条は北端が広がって浅い土壇状のくぼみとなっている。なお、西端の溝は東どりの溝を切っている。

ii) 遺物

先述したように、第6a層からは唐津焼をはじめとする陶磁器や土鍾 (Fig.8) が出土しているが、ここで述べた遺構からは顕著な出土遺物はない。

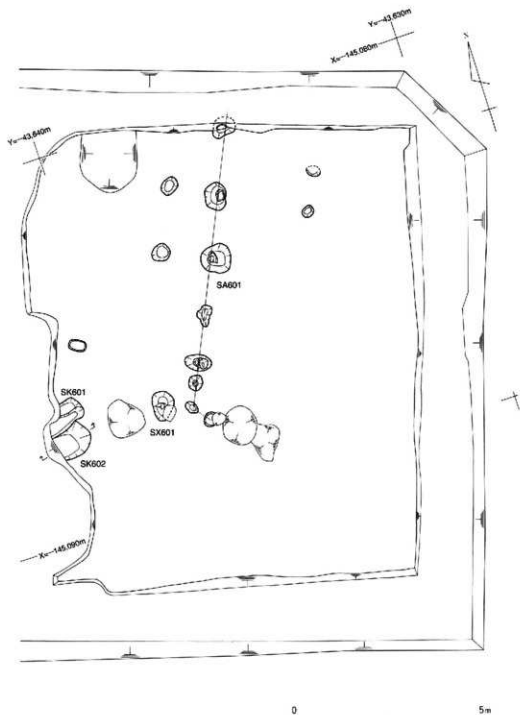


Fig.10 魯昭公後期第3段階 遺構実測図

3) 豊臣後期第3段階

第6a層上面遺構群の新しい一群をこの段階のものとする。柱穴・ピット・鍛冶炉・土塋などがある。

i) 遺構 (Fig.10~13、図版5~9)

SA601 (Fig.11、図版6・7)

調査区東部北半で礎石を埋めた柱穴3個と小ピットなどがみつかった。これらの配置を見ると、礎石を有する柱穴は一直線に並び、その南に続いて小ピット4個が不規則な間隔で並んでいる。これらは一連のものとみなしうるので、とりあえず辨と考えておく。南端で東に1間分折れるようにも見受けられる。小ピットはいずれも深さや平面形態が揃いで、柱痕跡が明瞭にはみつからないため、小さな礎石の抜き取り穴かとも思われるが、確たることは不明である。これに対して、北側の礎石をもつ柱穴はやや大型で、生活面から数cm~10数cmほど下に礎石を埋めている。柱間寸法は、礎石のある2間分は1.8mの等間で、その南の2間分は2.7mを2等分したものかもしれない。

その他の柱穴・小ピット

SA601の東西には2個ずつ小ピットが存在する。東側の2個は深さ5~10cm程度、西側の2個は10~15cm程度である。これらも柱痕跡がなく、小さな礎石の抜き取り穴かとみられる。その場合、先にSA601とした礎石3個と組合って建物となる可能性も出てくる。このようにこの時期の柱穴・小ピット群

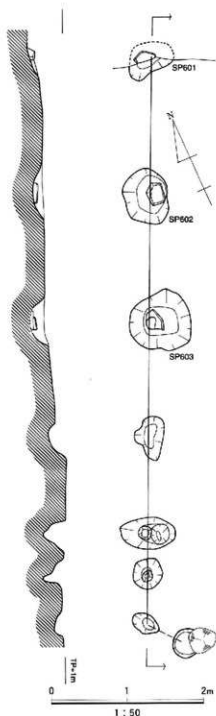


Fig.11 SA601実測図

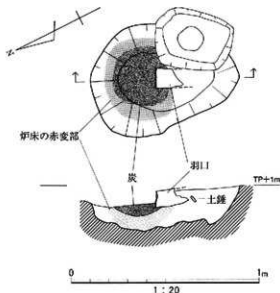


Fig.12 SX601実測図

下数cmほどが赤く焼けて硬化しており、深さ約0.15mの床面より上には炭・灰がつまっていた。羽口は先端を北東にむかって少し下げた状態で出土し、炉床と同じ粘土で固定されていた。その粘土も赤変し、硬化していた。羽口先端付近も焼けただけ、赤変していた。レベルが高くなる基部は壊れていた。なお、掘形の南東部は小柱穴に破壊されている。

土壌 (Fig.13)

以下に述べる土壌は、第5層が分布しない東部南半で検出されたため、第4d層除去後、第6a層の遺構面でみつかったものである。したがって正確な所属時期がこの段階であるとは限定できないが、ここで報告しておく。SK601・602は切合って検出され、前者が新しい。深さはいずれも0.1m内外で、西側は第3層で埋まる落込みによって壊されていた。

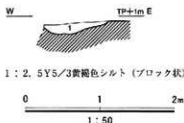


Fig.13 SK602断面実測図

はいくつかの可能性を考えておく必要があると思われる。なお、後述する鍛冶炉SX601を切る柱穴は柱痕跡が確認でき、掘立柱であるが、これがどのように他の柱穴と組合うのかも不明である。

鍛冶炉SX601 (Fig.12、図版8-9)

SA601南端の西側で検出した土壌には炭が充満しており、ファイゴの羽口が原位置を保ったままで検出されたので、鍛冶炉跡と判断された。炉は長径0.8m・短径0.6mの掘形内に、6a層に似た粘土を厚く敷いて炉床としている。炉床は床面とその

ii) 遺物 (Fig.14、図版17-26)

鍛冶炉SX601からは羽口19や鉋滓、土鍾21が出土している。羽口は取り上げ後の劣化により、破片のみ図化した。鉋滓はさほど大きな破片がなく、碗形滓か否か不明である。20は断面の形状、焼成度が低いことなどから、羽口そのものというより、羽口と通風管をつなぐジョイ

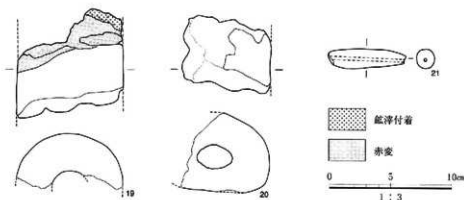


Fig.14 SX601出土遺物実測図

ントのようなものかもしれない。平坦部を地面に置き、羽口と同じ粘土で両者を固定したかと推測される。それ以外はいずれの遺構からも、顕著な出土遺物はない。

4) 豊臣後期第4段階

調査区東部北半に盛土（第5層）による土壇が造成される段階で、『報告』IでいうⅡ-2期にあたるとみられる。

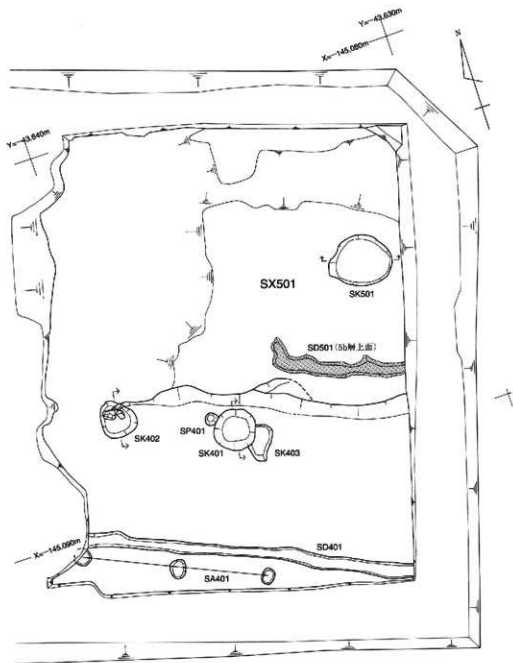
i) 遺構 (Fig.15、図版10～12)

土壇SX501

この土壇は調査区の東部北半で検出された。西側を第3層の落込みで壊されているので、本来の規模などは不明である。高さ0.8～1.0mを測るが、一気に造成されたものではない。まず厚さ0.2～0.3mあまりの第5b層による盛土が行われた。第5b層は北端部で低く落込んで調査深度以深に達しているが、その上面で炭・灰の薄層や、また平坦部分では溝SD501が検出されるため、ある時期の地表面であったとみられる。ただし、先述のとおり北端では窪地となるため、安定した生活面とはいいがなく、ごく短期間のものであろう。その後、第5a層の盛土が一気に施されている。その上面では土壇などがみつがっているが、なかには大坂冬の陣(1614)より新しい土壇もあり、この壇の存続期間を示すものである。

SD501

先述の第5b層上面で検出された東西溝である。西端で北へわずかに折れて途切れている。幅0.5m・深さ0.1m程度のものである。



道槽番号500番台は後期第4段階
400番台は後期第5段階

Fig.15 養臣後期第4・第5段階 遺構実測図

土壌

既述のとおり土壌SX501の上面でみつかった土壌には新しいものもあるが、SK501(Fig.16)は第5a層を少し掘下げ始めた時点で検出したので、豊臣期のものであろう。長径が1.7m・短径1.3m強で、深さは0.2m以上である。唐津焼碗38が出土している。また、SX501の南側は、この時点では第6a層がまだ地表面として生きており、豊臣後期第3段階で述べたSK601・602のなかに、この時期のものが含まれている可能性がある。

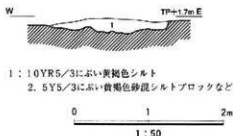


Fig.16 SK501断面図

ii) 遺物 (Fig.17・18、図版18)

土壌SX501を構成する第5層の盛土から唐津焼22~30や備前焼31・33・36・37、美濃焼碗(?) 32、土師器皿34・35などが出土している。23は口縁端反りで砂目を有し、また25は薬灰釉をかけた古手の唐津焼皿である。土鍾40や砥石39もある。なお、第5a層出土遺物は22・23・25・27・30~32・34~36・40で、他は第5b層からの出土である。30の外底面の目積み跡は貝目である。またSK501からは唐津焼碗38が出土している。

5) 豊臣後期第5段階

第1節でも触れたが、本調査区では慶長19年(1614)の大坂冬の陣に伴う焼土層が確認できなかった。したがって豊臣期と徳川期を分かť鍵層がないため、出土遺物からの推測とならざるをえない。その遺物量も多くはないが、一応、第4d層の整地は豊臣期とみられる。ただし、その上面遺構の遺物はきわめて少量で、豊臣後期か徳川初期か、明確な判断はできないが、ここで報告しておくたい。なお、この段階には前段階に造成されたSX501はまだ存続している。

i) 遺構 (Fig.15・19、図版11~13)

SD401 (Fig.19、図版11・12)

調査区の南端で、東西方向の溝が検出された。この溝は土壌SX501の南約4mに位置し、ほぼ壇の向きに平行している。最大幅0.6m、深さ0.15m程度を測る。埋土に炭を含み、人為的に埋められている。

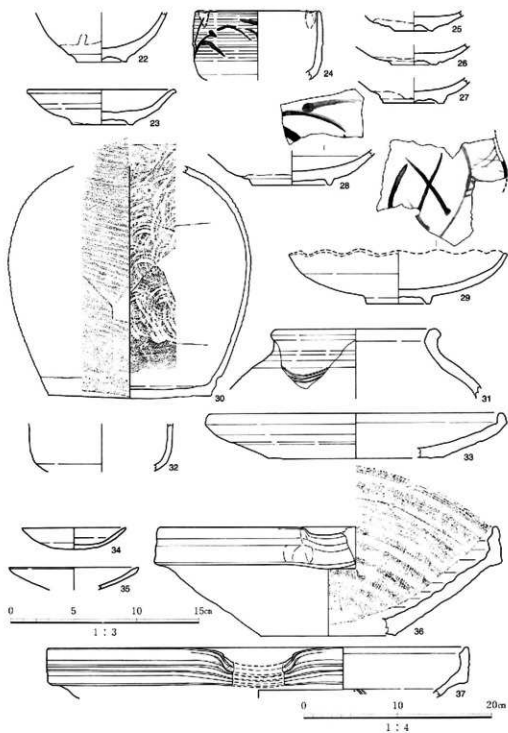


Fig.17 第5層出土遺物実測図(1)

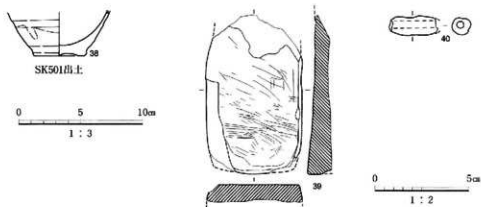


Fig.18 第5層出土遺物実測図(2)

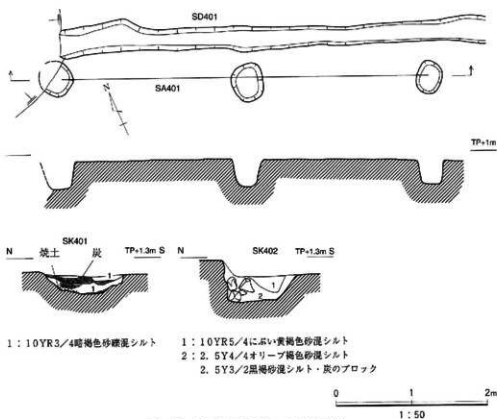


Fig.19 豊臣後期第5段階 各遺構実測図

SA401 (Fig.19、図版11・12)

SD401の南となりで、同一の方向(N-65°-W)をとる柱筋2間分を検出した。いずれも直径0.3~0.5mの小ピットであるが、深さは0.35m前後に及ぶ。明確な柱痕跡は確認できなかった。埋土に炭を多く含んでいた。柱間寸法はいずれも2.4m程度である。東に続くピットの有無は不明である。建物の北側柱列である可能性もある。

土壌・小ピット

SK401・402 (Fig.19)はともにSX501の南斜面裾に位置している。SK401は直径1.1m・深さ0.3m弱で、埋土に多くの炭や焼土を含む。フィゴの羽口やコンテナバット1箱程度の鉾滓、焼けた石(長径16cm)などが出土した(図版26)。SK402は東西・南北とも約0.9mのやや不定形な土壌で、深さ0.3m、やはり炭のブロックや人頭大の石を数個含んでいた。SK403・SP401はともに第4d層に類似した埋土で、第4d層下面が基底面の遺構であろう。SK403は南北約1.0m、深さ約0.2mである。SP401は直径約0.35m、深さ約0.3m弱を測る。

ii) 遺物 (Fig.20、図版19)

本遺構面のベースである第4d層出土からは唐津焼碗41・42や黄瀬戸43、土師器皿45などが出土している。量は少ないが、黄瀬戸の存在はやや古い傾向を示し、徳川期には降らない可能性を高めている。一方、本層上面のSK402から出土した大和型の土師器土釜44は小破片であるため、豊臣期か徳川初期か不明である。また、SK401からは羽口2個体分出土した(図版26)。46・296ともに、炉壁に接する先端部にガラス化した鉾滓と赤く焼けた炉壁の粘土が付着している。ここから出土した多量の鉾滓には碗形滓が目立っている。

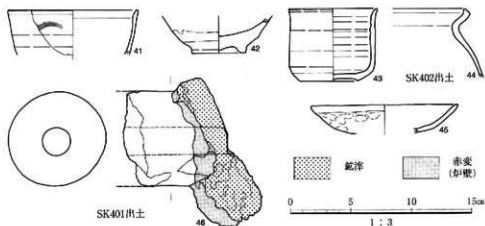


Fig.20 第4d層出土遺物実測図

第3節 徳川期の遺構と遺物

1) 徳川期第1段階

第4d層の上には炭・灰の第4c層が形成される。調査の初期にはこれが大坂冬の陣の火災に伴うものかとも思われたが、本層にはコンテナバット1箱ほどの銹滓を含んでいるため、この炭・灰層は何らかの金属器生産に由来するとみるのが妥当であろう。遺構は第4c層の上面で検出された。この段階でも土壇SX501はまだ存続している。徳川初期の17世紀前半の遺構群である。これ以後は、『報告』ⅠのⅢ期にあたる。

i) 遺構 (Fig.21、図版11・12・14)

SA402 (Fig.22)

前段階のSD401の北となりで柱筋2間分を検出したが、柱穴は一直線には並ばず、少し振れている。柱穴は直径0.3m程度と小さく、柱痕跡も不明瞭であったが、東端のものは直径0.15m弱で、深さが0.5mほどあることが確認できた。柱間寸法は東の1柱間が約3.8m、西の1柱間が約4.2mである。中央の柱穴の北側にも小柱穴がひとつあり、何らかの意味があるのかもしれない。

SE401 (図版14)

土壇SX501の南となりでみつかった井戸である。著しい湧水のため詳細は不明であるが、直径約1.0mの掘形内に井戸瓦を用いて井筒を組んだものである。井筒は土圧のせいか歪んでいた。井筒内の埋土から初期肥前磁器の碗を含む陶磁器類が出土している。この遺構面の最終段階を示すものである。

SK404 (Fig.23)

土壇SX501の上面でみつかったこの土壇は、正確には第4a層基底面の遺構であるが、いま述べたSE401とほぼ同時期の遺物が出土したため、この段階のものと考えられる。東側が調査区外に及んでいて全形は不明だが、南北約1.1m、深さ0.4mの規模である。

SK405 (Fig.23)

SK404に切られる土壇で、径約0.85m、深さ0.3mを測る。遺物はなく、豊臣後期段階まで遡る可能性がある。

SK406 (Fig.23)

この土壇は現代の攪乱によって直上層が失われていたため、正確な層位関係は不明であ

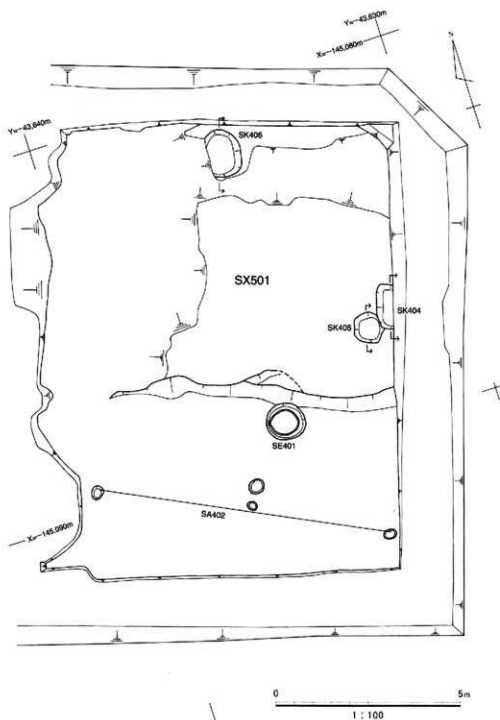


Fig.21 徳川期第1段階 遺構実測図

るが、便宜上ここで報告する。東西径約1.4m、深さ0.4mの規模である。顕著な遺物は出土していない。

ii) 遺物 (Fig.24、図版19)

第4c層出土遺物は多量の磁滲で、これには碗形滓が含まれている。SE401の井筒内からはやや丈高の美濃焼碗47、筒形碗かとみられる初期肥前磁器48、砂目の唐津焼碗49のほか、土師器皿50・51などが出土している。17世紀第2四半期であろう。SK404では、砂目で剣形のスタンプをめぐらせた刷毛目唐津の皿52（高台内施釉）と底部糸切りの土師器皿53が出土した。これもほぼ同時期である。なお、第4c層出土の中国製青磁碗54は、本来下層に伴う中世のものである。

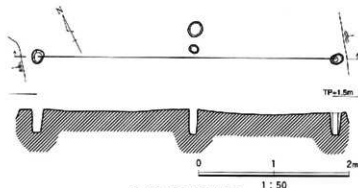


Fig.22 SA402実測図

2) 徳川期第2段階

この段階で調査区南東の第4c層の生活面は、これまで残っていた土壇SX501と同じ高さまで第4b層の盛土によって覆われる。その上に、さらに第4a層の盛土が行われる。これは

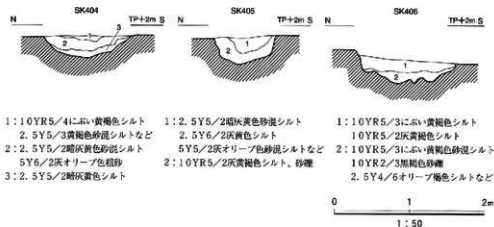


Fig.23 徳川期第1段階 土壇断面実測図

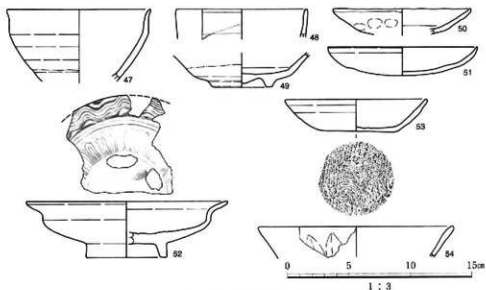


Fig.24 第4c層及び上面遺構出土遺物実測図

SX501の上にも及んでいる。これが【報告】Ⅱという徳川期第一次屋敷地拡張であろう。これに相当する【報告】Ⅱの第6層は複数の細分に細分されているものの一括の整地層とされたが、今回は第4a層と第4b層の層理面で若干の遺構が検出されている。ただこれも、第4a層とSE401の遺物相に大差がないため、さほど長期にわたる遺構面とは考えにくい。ここでは第4b層上面の遺構を報告するが、その下限は第4a層の遺物(Fig.26-27)が示す17世紀中ごろであろう。

i) 遺構(Fig.25)

土塹・柱穴・ピット群

SK407は長径0.9m、深さ0.2m強の浅い小土塹である。このほか4個のピットがみついている。いずれも径0.4~0.5m程度で、なかには柱痕跡が明確に検出され、柱穴と認められるものもあるが、他は不明である。

ii) 遺物(Fig.26-27、図版20)

ここで述べた遺構に伴う顕著な遺物はないが、これらの下限を示す第4a層出土遺物を報告する。55は初期の肥前磁器皿、56・57は唐津焼碗で、前者は内野山系のもの、後者は高台無釉である。58・59は砂目の唐津焼皿である。ほかに焼締陶器として備前焼60・68、丹波焼69~71があり、61は丹波焼水差しとみられるが、備前焼かもしれない。瓦質土器火入れ62や土師質土器の焙烙63・皿64~66、硯67もある。63の外面は右上がりの平行タタキで

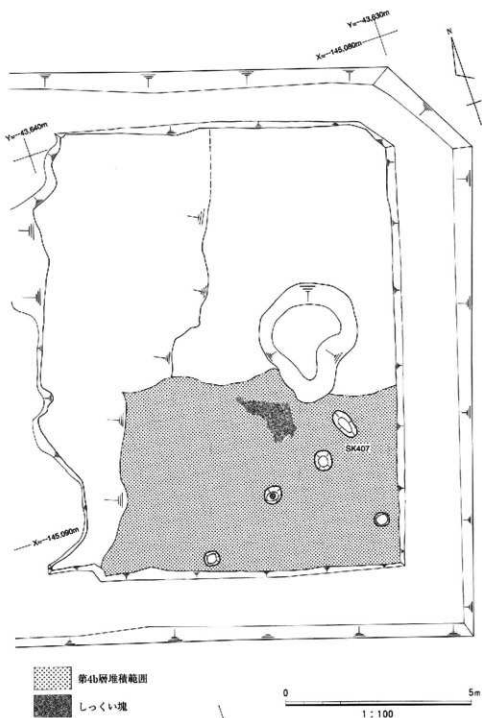


Fig.25 徳川期第2段階 遺構実測図

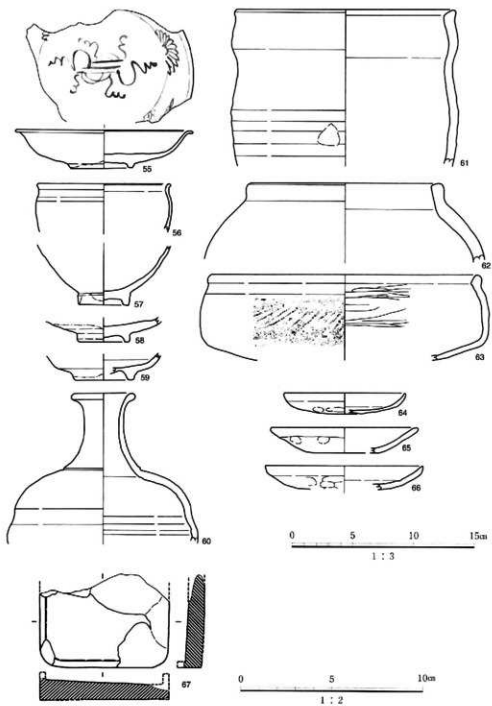
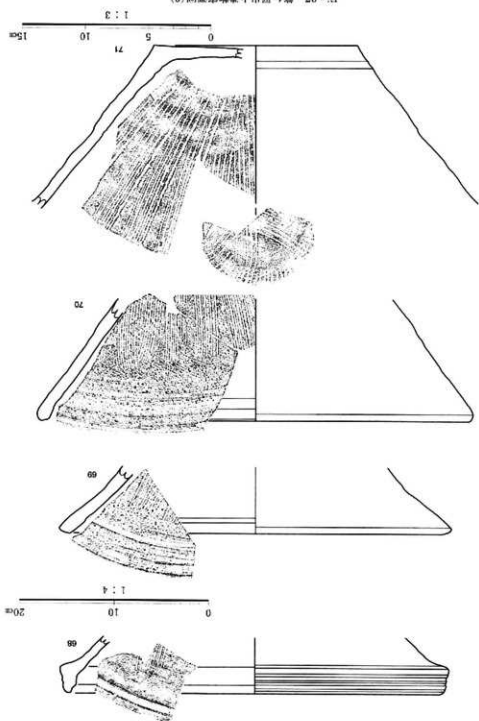


Fig.26 第4a層出土遺物実測図(1)

Fig. 27 第4層出土遺物実測図(2)



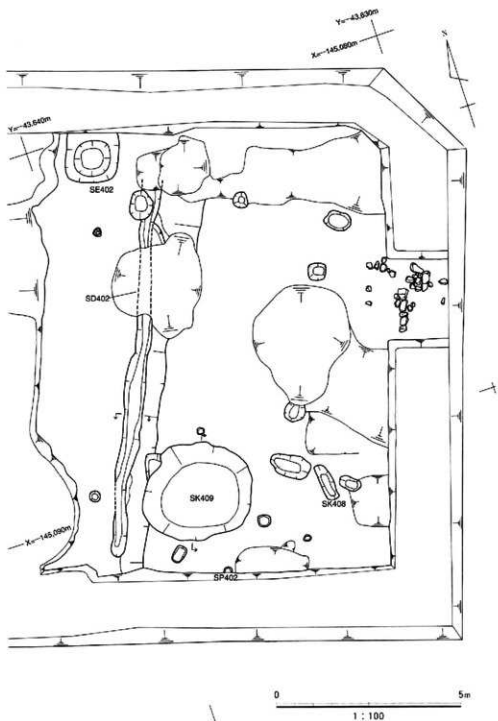


Fig.28 徳川期第3段階 遺構実測図

ある。以上の土器の様相は江戸時代第3段階（註1）ごろで、17世紀前半までとみられる。

3) 徳川期第3段階

ここでは後述する第3層より古い遺構と、第3層が分布しない東半部で第4a層を切ってみつかった遺構を報告する。

i) 遺構と遺物 (Fig.28~30、図版15・16・19)

SD402

調査区の中央から東部にかけてみつかった南北溝で、残存幅0.3~0.6m、深さ0.2mを測る。ちょうど第3層が西へ下って落込み始める位置にあたり、その直下で検出されたため、この段階からこのラインが何らかの地境となっていた可能性を示す。出土遺物は京・信楽系の香炉72などで、18世紀代（中ごろ~後半か）のものである。なお、この溝を切る土壌が北側でみつかったが、時期のわかる遺物は出土していない。

SE402

SD402の西でみつかった井戸で、東西1.4m、南北1.6m前後の方形掘形内に直径1mほどの井筒痕跡が認められたが、湧水で完掘できなかった。おそらく井筒には井戸瓦を用いていたものと思われる。井筒の痕跡内から肥前磁器の筒形湯呑み碗や鉄釉土瓶などが出土し、この遺構が18世紀後半から19世紀のものであることを示している。

土壌・柱穴・ピット群

東部の南半部では、第4a層の直上が現代攪乱層であった。ここでは散在する土壌・柱穴・

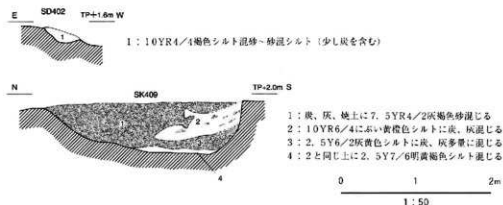


Fig.29 徳川期第3段階 各遺構実測図

ビット群が検出された。時期のわかる遺物は非常に少ないが、SK408では鉄釉土瓶の蓋73が出土している。18世紀後半から19世紀にかけてのものである。大型の土壙であるSK409 (Fig.29) は長径3.0m、短径2.7mで、深さは0.7mの規模であるが、埋土に多量の炭・灰を含み、19世紀代とみられる口縁玉縁状の土師器火入れ(註2)や焼けた花崗岩などが出土している。このほかSP402では、17世紀後半から18世紀にみられる京焼風肥前陶器の破片が出土している。

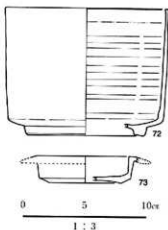


Fig.30 徳川期第3段階出土遺物
実測図

4) 徳川期第4段階

幕末期と推定される遺構と遺物群である。

i) 遺構 (Fig.31、図版14・16)

落込みSX301 (Fig.7)

調査区の中央から西部にかけて、第3層で埋まる大規模な落込みがみつっている。先

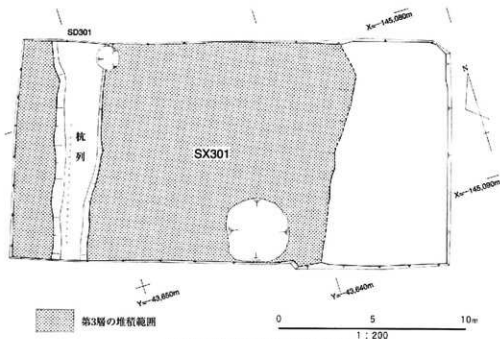


Fig.31 徳川期第4段階 遺構実測図

にも述べたように、この落込みは下層のSD402と同じ位置が東端となっているため、そこを地境として人為的に西へ掘込まれたものであろう。その際、地境より西のSE402を壊しているの、その時期は19世紀に降るとみられる。落込みの深さは工事の掘削深度よりさらに深く、また著しい湧水のため、トレンチによっても確認できなかったが、1.5m以上である。これを埋めた第3層には、19世紀代の陶磁器類が大量に含まれていた。

SD301 (Fig.7)

第3層の整地層の上から掘込まれた南北の大溝である。幅約4.5mで、深さはやはり確認できなかったが、1.5m以上である。溝の西縁では計18本の木杭が検出されたので、この溝は本来は杭で固定された板組のもので、その外側は裏込めにあたるのであろう。この遺構と切合う近代の井戸より古く、また出土遺物は僅少かつ細片ながら、第3層のものと変わらないため、明治4年(1871)の造幣局開設より古いか、あるいは開設ごろの短期間の遺構と思われる。

ii) 遺物 (Fig.32～49、図版21～25・27、原色図版2・3)

ここではSX301を埋めていた第3層出土遺物を報告する。先述したように、この整地層の年代は、SD301とともに下限が明治4年ごろとみられる。ただし、すべてが幕末期のものではなく、19世紀前半のものがむしろ多いようで、純粋な一括遺物群というわけではない。なお、調査区西部ではSD301の輪郭が未確定なままに掘下げたため、その遺物が混入している恐れがある。よって念のため、純粋な第3層の遺物群である調査区中央部出土のものと、西部出土のものに分けて報告する。

中央部出土遺物

磁器碗類：74～94は肥前産磁器である。74～77は碗蓋、78～88・94は碗の身である。79・80・82・83・85・86は波佐見系とも呼ばれる粗製品である。88は唐草文様と見込みの松竹梅円形文の退化が著しい。94は赤絵である。89～93は小碗ないし小杯で、90は色絵、92はルリ釉である。92は瀬戸美濃産の可能性もある。95～114は瀬戸美濃産の磁器であるが、98・99・103・105などは透明釉が清朝磁器に近い青みを帯び、染付の筆使いもていねいな上手品である。95～99は碗蓋で、97の内面にはヘラ先の線刻で花模様と斜線模様を描き、薄いダミを施している。100以下が碗の身と小碗で、112は口紅を施し、見込みにスタンプまたはヘラ先で火炎宝珠を描いている。113は赤絵である。115は中国産かとみられる小杯で、高台内は無釉、分厚い透明釉に大きな貫入が入っている。116は西洋コバルトで染付された小杯で、産地は関西かもしれない(あるいは混入か)。

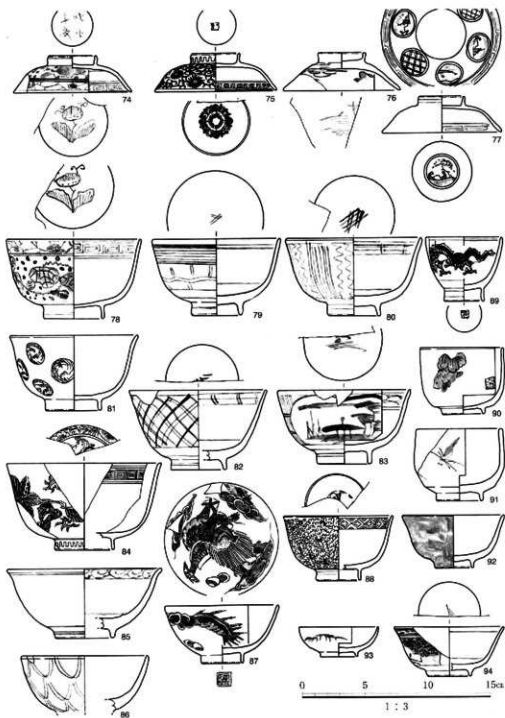


Fig.32 第3層出土遺物実測図(1)

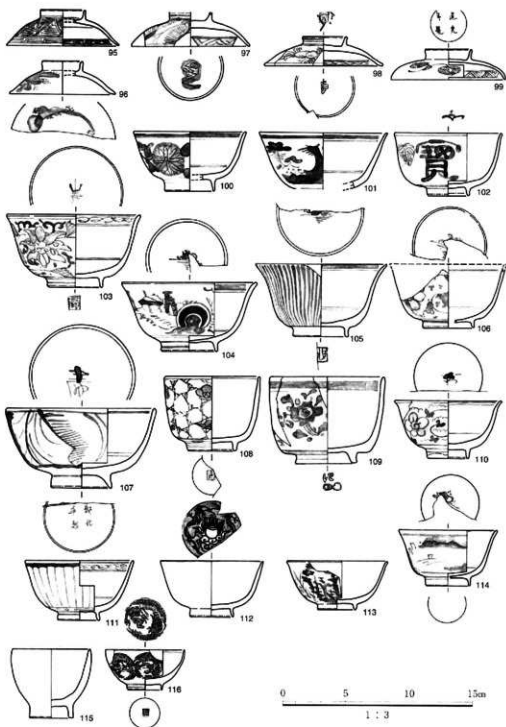


Fig.33 第3層出土遺物実測図(2)

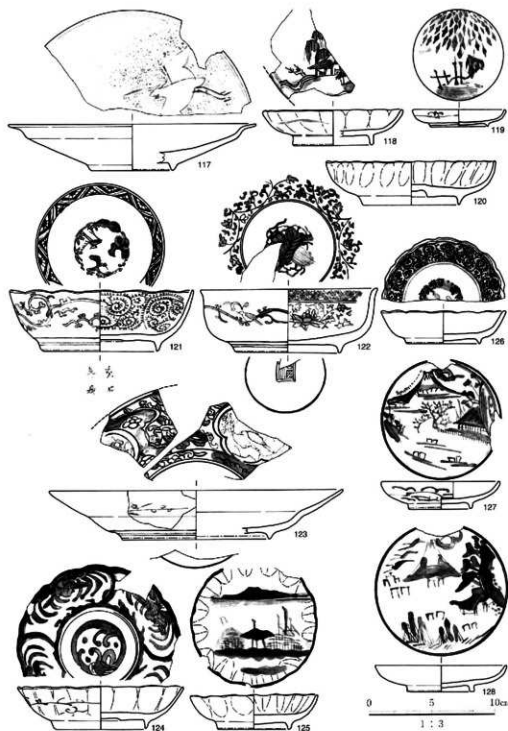


Fig.34 第3層出土遺物実測図(3)

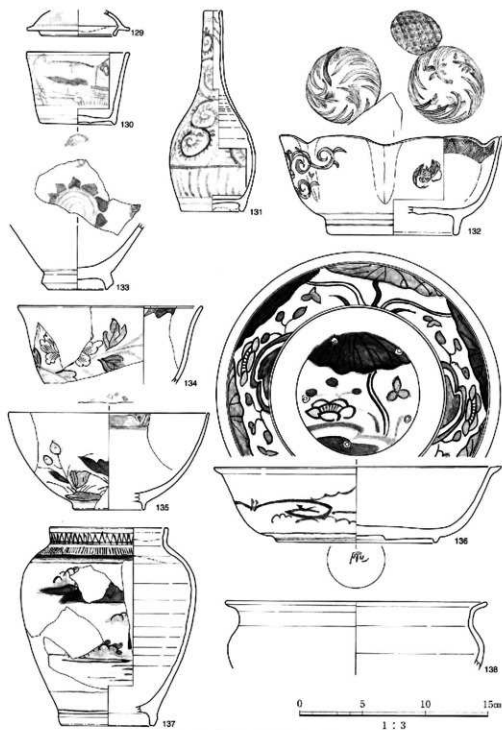


Fig.35 第3層出土遺物実測図(4)

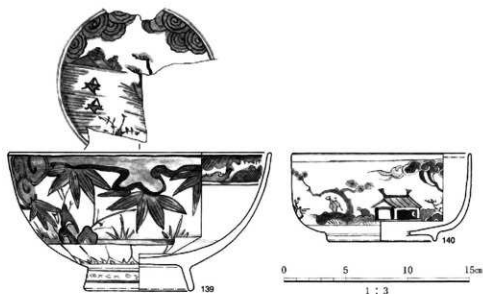


Fig.36 第3層出土遺物実測図(5)

磁器皿：117～124は肥前産である。117は吹墨を施した17世紀のものである。123は色絵である。125～128は瀬戸美濃産の小皿で、126はヘラ先で文様を彫込んだか、あるいは形押し文様か不明であるが、その上から呉須を施したものである。

その他の磁器：129～140は肥前産の鉢その他である。蓋129はルリ釉、広口壺138は内外面とも青磁釉である。蕎麦猪口130は粗製品である。鉢136の見込みには足付ハマの熔着痕が5個残り、蛇の目凹形の高台内にはガラス継ぎのマークがある。140は蓋物で、口縁釉剥ぎである。141～143は瀬戸美濃産で、141・142は水滴、143はやはり高台内にガラス継ぎのマークを有する小型の水注である。144～151は三田系の磁器で、144は青磁染付（外面青磁）、145は型物の青磁である。146～151は薄手の上質な染付で、150・151は徳利、他は急須類である。147には「與カ三造」の銘があり、148にも銘があるが、判読できない。152は黄南京の淡路産琺瑯焼で、上質な磁胎に黄褐釉を内外面に施している。

陶器碗皿類：153は肥前もしくは九州産と思われる碗で、白泥と鉄絵を施したものである。154(註3)・155は信楽焼の小杯、156は瀬戸美濃の碗である。157～161は灯明皿で、鉄釉（鉄泥？）を施した157は志土呂系か。他は信楽系である。162は瀬戸美濃の馬目皿、163も瀬戸美濃の鉄絵皿である。164は形押しの京焼系小皿か。165～170は土師質の胎土に低火度釉を施した軟質施釉陶器である。165・166は形押しで緑釉を施した京焼系とみられ、その他は柿釉皿とも称される透明釉の灯明皿である。

陶器蓋物：171～174は信楽系で、香合であろう。大小さまざまな大きさのものがある。

陶器土瓶・急須：175～181は土瓶蓋で、180・181は落とし蓋である。182～189・194は土瓶である。蓋とともに様々なタイプのものがあるが、白泥に染付や鉄絵を施す186・188、白泥線で文様を描く177～179、182・187などが多い。184は京焼系かとみられる形押しの体部に黒粉を混ぜた白泥をかけ、さらに白泥の菊花を点じた優品である。185は「道八」銘を有し、白化粧の上から黒みを帯びた呉須で染付けている。189・194は薄手で素焼きの万古系で、189には透明感のある白泥を流し掛け、鳥文を貼付けている。蓋190は外面鉄軸である。蓋191も万古系である。192・193・195・196は急須で、192・193はセットとみられ、取っ手がはがれた身の193は白泥線で施文されている。195・196も万古系である。

陶器土鍋・行平：198～204は土鍋である。鉄絵を描いた蓋197と198は万古系のもので、後者の体部と底部内面に施軸されている。200・204はまだら模様の鉄軸を施した優品で、セットであろう。これも万古系かもしれない。201は軟質施軸陶器で、「瓦弥」の刻印がある。蓋は205・209が土師質の胎土に鉄軸（鉄泥？）と白泥を施したもので、陶胎の210も透明釉の下に白泥線の文様が描かれている。206～208・211は行平で、207・208は取っ手に形押し文様がつく軟質施軸品である。

陶器徳利類：212・213は京焼系で、212は緑釉と鉄絵、213は染付が行われている。214は沖縄・壺屋の泡盛容器で、胎土は備前焼に酷似する。215～220は丹波焼の鉄軸徳利で、大きさは様々である。体部の銘は、215「天満」、218「正」、219「今」「上」、220「上本二」などがあるが、読めないものも少なくない。肩部に髷描き文をもつ鉄軸の221も丹波かもしれない。これは半磁胎である。

その他の陶器：222～225は鉢で、222は鉄軸、223は透明釉、224は海鼠釉をかけ、225には白泥線の文様が描かれている。226は瀬戸美濃の尿瓶、227は丹波系の広口壺、228は堺もしくは明石産の摺鉢である。229は産地不明の摺鉢で、口縁部に二重の突帯がつき、内面は口縁まで細かい擦目をつけている。230は内面も施軸するが、香炉であろうか。九州産か、志土呂系か。231は備前の火入れ、232・233は同一個体らしき大型鉢で、瀬戸美濃または信楽系であろう。234は外面緑釉の小水注、235・236はいずれも蓋つきの小壺で、235は茶入れか。236は赤みの強い素焼きである。237～239は瀬戸美濃の大型鉢である。土師質土器：240・241は焙烙G類で、北河内・枚方の津田産である。243も焙烙でD4類である。242は焼塩壺である。

貨幣：一分判金244は長さ16.0mm、幅9.5mm、厚さ1.5mmで、表には桐の極印、裏には左上部

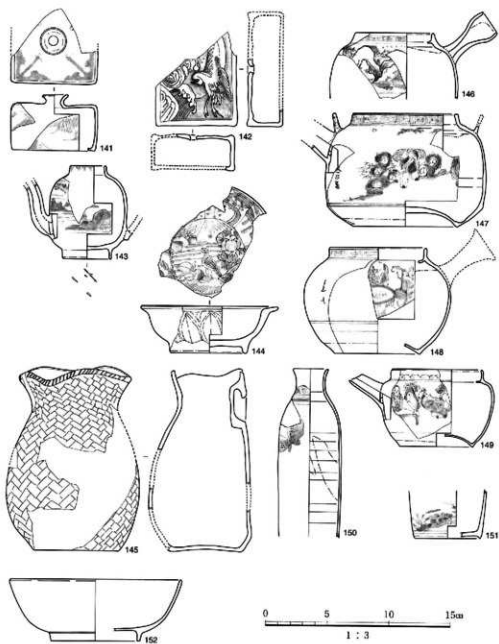


Fig.37 第3層出土遺物実測図(6)

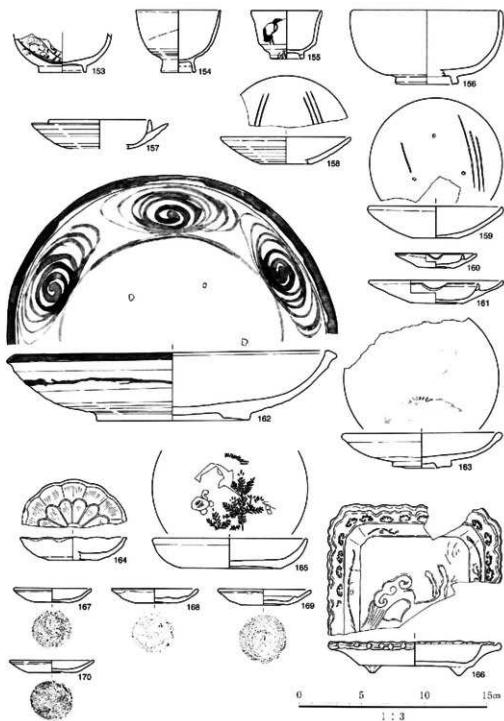


Fig.38 第3層出土遺物実測図(7)

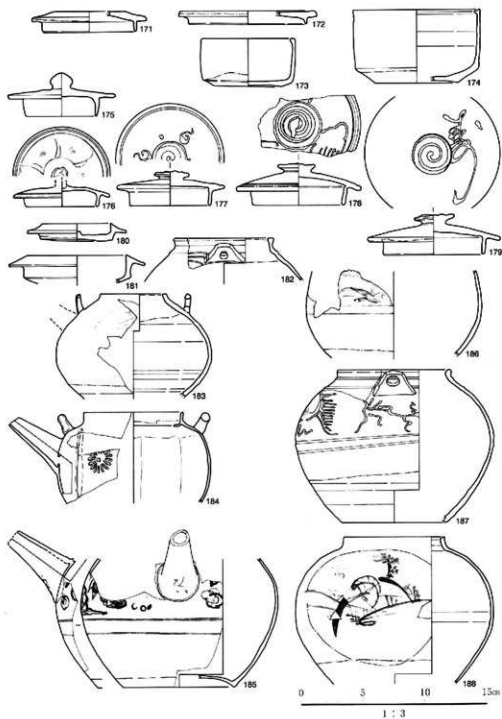


Fig.39 第3層出土遺物実測図(8)

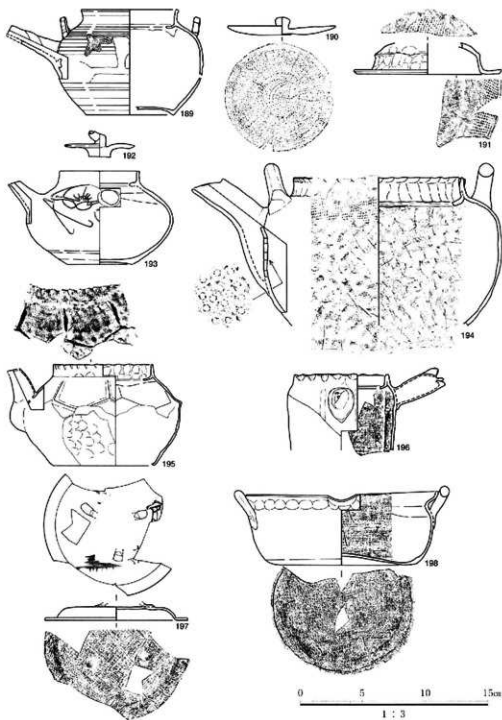


Fig.40 第3層出土遺物実測図(9)

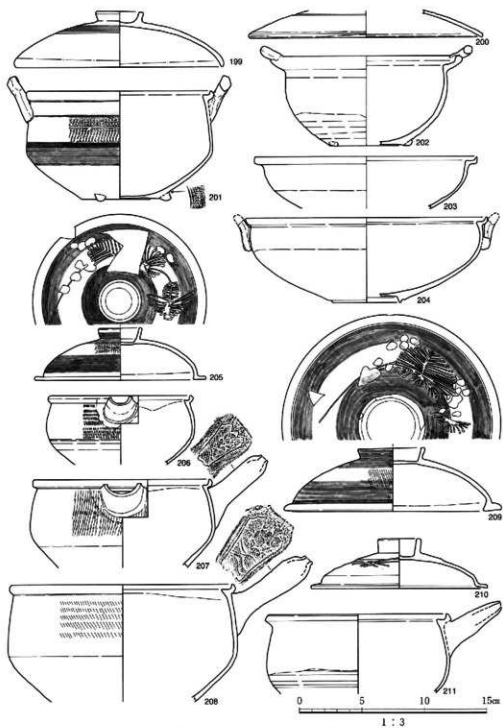


Fig.41 第3層出土遺物実測図(10)

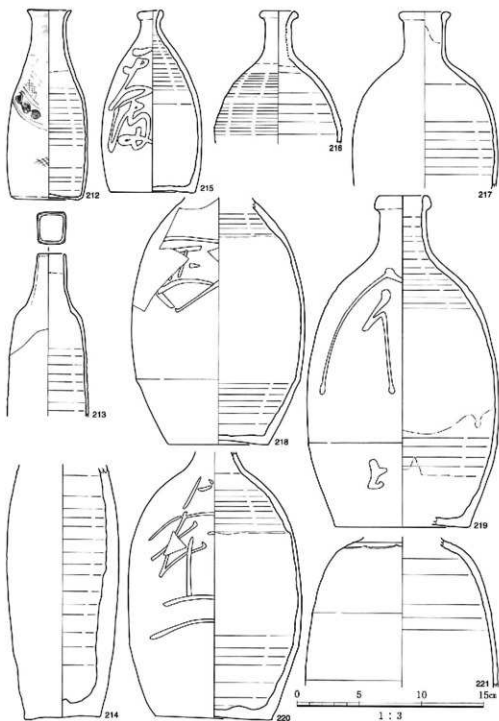


Fig.42 第3層出土遺物実測図(11)

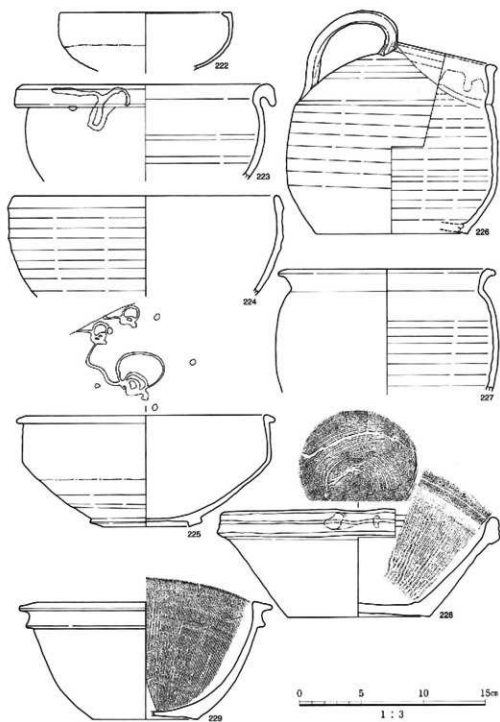


Fig.43 第3層出土遺物実測図(12)

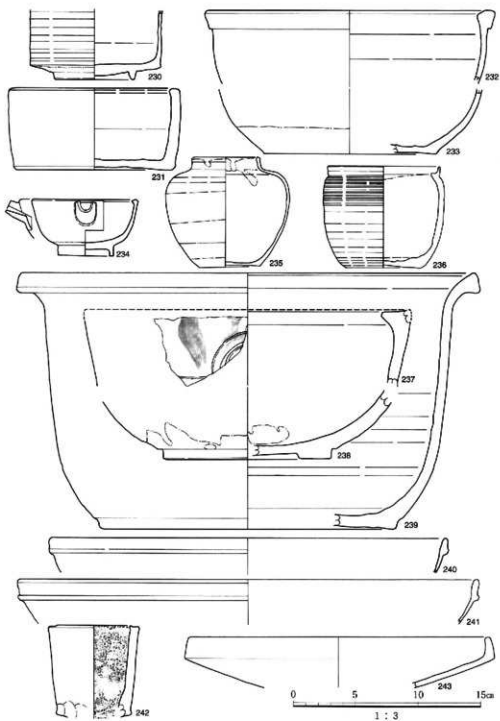


Fig.44 第3層出土遺物実測図(13)

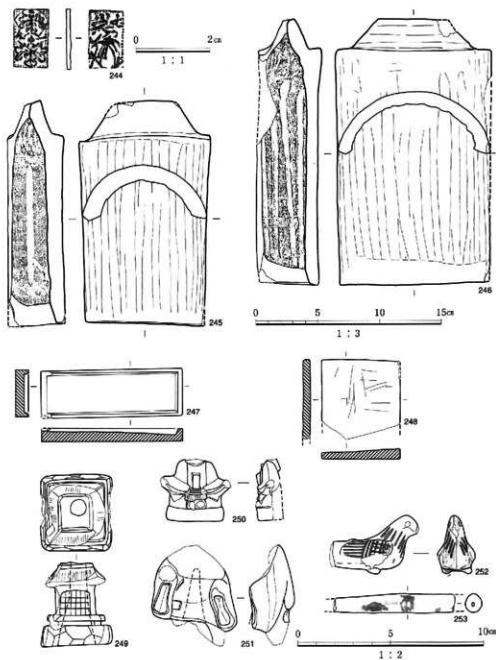


Fig.45 第3層出土遺物実測図(14)

から「光次」銘と花押のほか、右上部に「文」の字が打たれている。「文」は真書体なので、元文元年(1736)以後、80年以上流通した真文一分判金であることがわかる。重量は3.25 gである。蛍光X線分析(非破壊)によって、その成分は金(Au)70%、銀(Ag)30%ほどで、ほかにごくわずかの銅(Cu)が含有されていることがわかった(註4)。



Fig46 第3層出土一分判金244(約2倍)

瓦：245・246はいずれも完形の丸瓦で、前者の方がやや小さい。ともに凸面はやや強い縦のナデ調整、側縁は面取りされている。凹面は側縁の面取り前に、ヘラで縦の筋を刻んでいる。

石製品：247は硯、248は砥石である。硯は小型で、携帯用かとみられる。海と陸に明確な境はない。

土製品(図版25)：249～253はミニチュア土製品で、250・252・253には低火度の緑釉と透明釉をかけている。250をのぞいてみな穿孔されているが、孔の形態は様ではない。252は上からみると三角形に穿孔され、棒状となる尾部の小孔に続いている。この小孔は253と同様のため、両者は同一個体の笛かもしれない。

西部出土遺物

西部で出土した第3層の遺物は、中央部出土品と重複するものが大多数であるため、ここでは中央部にはないものを中心に、最小限の遺物について述べることにする。

磁器：254～257は小杯で、型作りと思われるきわめて薄手のものが大半である。257は瀬戸美濃産で、他の多くもその可能性がある。254は赤絵、他は色絵で、文字は金文字である。255・257には人工コバルトが使われている。碗258～265のうち、258・259・262・263は肥前系で、たけ高の器形が目立つ。260は中国徳化窯の白磁小碗で、高台内は無釉、体部外面には外型成形時の胎土の皺が認められる。261も清朝の染付小碗である。264・265は瀬戸美濃産で、後者は天然呉須で染色体風の様を染付し、口紅が施されている。266も瀬戸美濃の白磁皿で、見込みに寿字文がスタンプされている。267・268は肥前系の皿である。269・270は淡路産珧平焼の蓮華と小皿で、いずれも龍文がスタンプされている。三田系271～273のうち、271は青磁小皿、272・273は後者に「与三造」の銘があるセットの

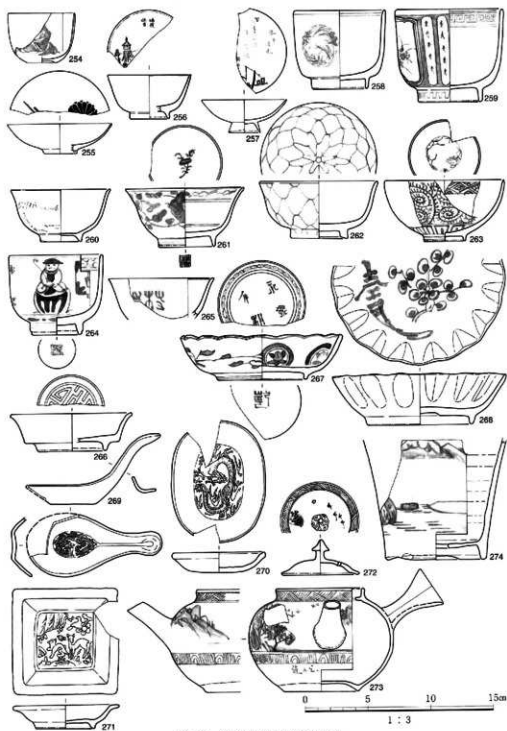


Fig.47 第3層出土遺物実測図(15)

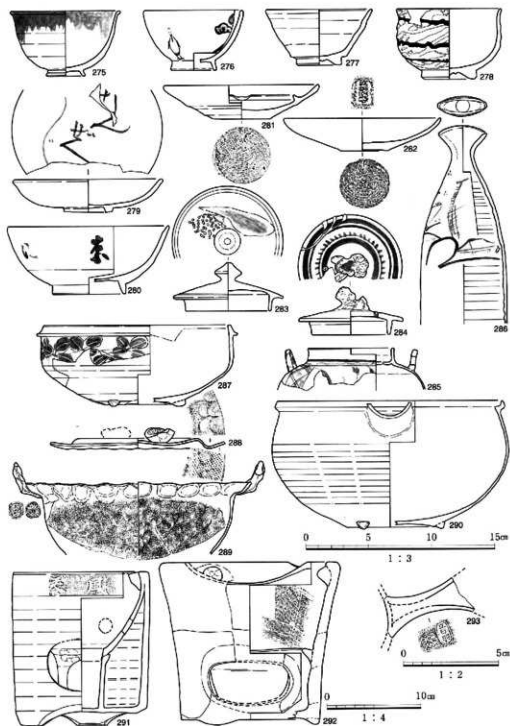


Fig.48 第3層出土遺物実測図(16)

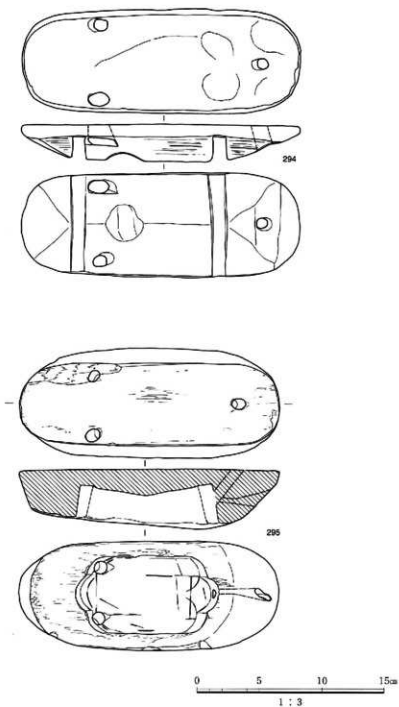


Fig.49 第3層出土遺物実測図(17)

染付急須で、銘は147とは字体・筆跡が異なる。274も三田系かまたは関西系の植木鉢であろう。

陶器：小碗275～278のうち、275・276は京・信楽系で、前者は緑釉を口縁内外面に流し掛けたもの、後者は白化粧の上から鉄絵などで鶴・松を描いている。277・278は萩焼小碗で、前者は海鼠釉、後者はビラ掛けのものである。皿279には「なんぜんじ」と鉄釉で記されている。281・282は軟質施釉陶器の灯明皿で、後者の銘は「高山」であろう。碗280には鉄釉で「なに□屋」と書かれている。「なにわ屋」であろう。京・信楽系か。283・284は土瓶の蓋で、後者は白泥上に染付している。285は山水文土瓶、286は京・信楽系の銚子である。287は良質な胎土をロクロ成形して口縁を隅丸方形に整え、白泥の上に枝葉を染付けた優品である。欠失部分の下に「屋」の一字のみ残っており、また接合しないが取っ手の破片もある。288・289は万古系の蓋と鍋で、前者の天井部内面にのみ施釉されている。後者は把手の体部に接合する2個所に刻印があり、一つは菊花、もう一つは銘「□山」である。290は薄手で内外面施釉（灰釉か）の行平である。293は急須の取っ手とみられ、「乾」と「音羽」の刻印がある。灰白色の緻密な胎土に色の薄い鉄釉をかけている。

土師質土器：291・292は焼炉である。291は体部が二重になっている。内部には漏斗状の身がつき、下部には窓、上部には円孔が6個めぐる。外側の下部にも窓があり、底部を三方から割り取って三脚を造りだしている。口縁部には「琴風」の刻印がある。292も低い三脚を造りだし、下部に窓をあけている。内面には灰落としを乗せる鐙がつき、上部には7個所にハケメを巡らせている。口縁部は三方を低く割り落としている。

木製品：下駄294は前後2枚の歯と組合せるタイプのもので、裏面は下方に突出して縦長の稜をなす。表面には使用による摩耗が認められる。

このほか、SD301からも下駄295が出土している。これは裏面から内部を割り買いたもので、前部の紐穴は上方と前方の2個所に開いている。黒漆を塗っており、女性用とみられる。

第4節 結語

1) 本調査区における遺構の変遷

今回の調査では過去2回の調査でみつかった豊臣前期の遺構面を検出できなかった。その理由は、過去の調査では豊臣前期の遺構が、いずれも盛土によって高く造成されたものであったのに対し、今回の調査区ではそのような敷地の造成は豊臣後期までしか遅れず、この地点の地表面が低いままで推移したことによると考えられる。前期の遺構面は工事の掘削深度よりも低かったとみられ、部分的な深掘りトレンチでは充分確認できなかった。

よって、ここではまず、今回みつかった遺構を時代順に再述しておきたい。なお、ここでは遺構面の変遷を「段階」として扱い、遺物の編年観も併せて記しておく。

豊臣後期第1段階

第6b層上面の生活面で、遺構の存在を地層断面から知られたものの、実態は不明である。ただ、炭・灰の薄い堆積が確認されたこと、そこに僅少ながら陶磁器編年の豊臣後期1〔森穀1995〕に位置づけられる陶磁器が出土し、さらにこれを覆う6a層の遺物も同じ時期とみられることなどが確認できる。

豊臣後期第2段階

第6a層上面遺構のうち、切合い関係から古く位置づけられる遺構群である。この地点が耕作地であったことを示す小溝群がみつかった。

豊臣後期第3段階

第6a層上面の新しい遺構群で、礎石を用いた塀（建物の一部である可能性も残る）や、フイゴの羽口が原位置を保ったままの鍛冶炉などが検出された。

豊臣後期第4段階

第6a層の生活面上に調査区の東部北半で土壇SX501が造成された段階である。土壇を形成する第5層から出土した陶磁器には、端反りで砂目をも有する唐津焼Ⅲ23〔積山洋1997〕や、口縁がさほど肥厚しない備前焼揃鉢36・37が含まれるなど、純然たる後期2の段階よりはやや古い傾向を示している。

豊臣後期第5段階

土壇SX501の南側はまだ地表面が低いままであるが、そこに第4d層で若干の整地が行われた段階である。第4d層の遺物もかなり少ないが、黄瀬戸を含むなど、徳川期まで下ると

は考えにくく、豊臣期の最終段階とみられる。その上面では溝や塀（建物の可能性もあり）、土壌などが検出され、遺物には鉾澤も多く含まれていた。

徳川期第1段階

土壇SX501の南側の低地では鉾澤を含む炭・灰層が形成される。これが第4c層で、その上面から掘込まれた井戸の廃絶時には初期肥前磁器が存在した。土器編年の江戸時代第2～3段階で、17世紀第2四半期であろう。この段階にも塀や土壇などの遺構がみつかる。SX501はこの段階まで存続した。

徳川期第2段階

SX501とその南側に盛土（第4b・4a層）が行われる。この造成によって調査区内ではやっとな低地がなくなり、過去の調査でみつかった屋敷地と同じ高さの生活面が形成された。第4a・4b層の遺物は江戸時代第3段階までで、17世紀中ごろまでには造成が行われたものとみられる。

徳川期第3段階

前段階に後続する遺構面や遺構の様相は明らかではない。第4a層より新しい遺構は散在するものの、明確なまとまりがなく、詳細不明である。ただ、調査区内に南北溝SD402が走り、それが18世紀に埋まったらしいこと、この溝が何らかの地境となつて、のちに第3層で埋まる大規模な落込みがつくられたことがわかるにすぎない。

徳川期第4段階

第3層で埋まる大規模な落込みが掘削されるのは、その直下で検出された井戸SE402が埋められた18世紀末か19世紀初頭以後のことである。その後この落込みが埋められ、さらにその上から南北の大溝SD301が掘削されている。第3層は大量に含まれていた陶磁器の様相から、幕末～明治初年のころの整地層とみられる。明治4年(1871)の造幣局開設直前であろう。

以上のように、本調査区での知見は過去の調査区とはかなり様相を異にする。それは第一に、この地点では予想されていたような豊臣前期からの屋敷地造成が認められず、一貫して低地のままで推移していることである。第二にその低地は、陶磁器編年豊臣後期1のある段階に耕作地から、一応は居住空間の一角となつたらしいが、低地であるため居住そのものには不向きで、時には小鍛冶が行われるような空閑地であり、豊臣期末か徳川の初期ごろまでそれが継続していたらしいことである。さらに第三に、徳川中期以後のある段

階から敷地を東西に分かつ地境が出現し、のちに西に向かって大規模な人工の落込みとなっていたこと、などである。

一方、部分的とはいえ豊臣後期の屋敷地造成や、徳川期の17世紀第2四半期ごろの屋敷地拡張（造成）など、過去の所見と一致する面も認めることができる。

2) 造幣局敷地南部における遺構の変遷

次いで、過去2回の調査結果に今回の知見を加え、全体的な遺構の変遷をたどってみることとする。なお、記述の便宜上、TN93-3次調査地を第1地点（『報告』Ⅰ）、TN95-3次調査地を第2地点（『報告』Ⅱ）、今回のTN96-1次調査地を第3地点と呼ぶこととする。

i) 層位の対応関係

3次にわたる調査において、各生活面の対応関係を捉える共通の鍵層が存在しなかったため、かなりの部分が出土遺物をもとにした推測とならざるをえないが、ここではその対応関係について、以下のように考えている。

まず、もっともわかりやすい鍵層は豊臣後期末、慶長19年(1614)の大坂冬の陣の焼土層であるが、第1地点の第2層、第2地点の第8層がこれにあたることは動かないであろう。第3地点ではこの焼土層は認められなかった。

次いで、その下層である豊臣後期の層準は、第1地点では第3層とSD501を埋めた第4層、第2地点では第9層・10層がこれにあたる。第3地点では第6a層～4d層までがこの時期である。このうち、土壇SX501の造成土である第5層は、後期の第4段階であるため、第1・2地点ともその新しい方の層準をもってあてるのが妥当であろう。とくに同一層準とみられる前者の第3c層と後者の第9層（後期第2次屋敷地拡張）は、第3地点第5層と対応すると推測される。よって第2地点の第10層（後期第1次屋敷地拡張）相当層は、第1地点の第4層または第3a・b層、第3地点の第6a層ということになる。

第1地点第5層は豊臣期の屋敷地を最初に造成した前期の整地層で、これは第2地点の第11層にあたる。第3地点ではこの時期の層準は明確ではなく、可能性として、第6b・c層がその候補となるが、調査はその深さまで及んでいない。

第1地点の第6層（中世）は第2地点の第12層と一連とみられるが、第3地点では遺物を伴う明確な中世層はない。一応、第6e・f層がその候補と思われる。

一方、冬の陣の焼土より上層の徳川期では、第2地点で豊臣期の石垣ラインの東斜面を

埋めた第7層が肥前磁器出現前とみられるが、これと同一ではないが時期の合う地層は第1地点では第1c層、第3地点では第4c層が、いずれもその候補となる。

第2地点の整地層である第6層は第3地点第4b・4a層に相当するが、第1地点ではこの層は確認されていない。初期の肥前磁器を含む段階である。

これより上層では、屋敷地東辺の盛土である第1地点の第1b層と第2地点の第4層（徳川期第2次屋敷地拡張）が同一層かとみられるが、さらに上層では3地点を通して徳川期の様相を明らかにするには至っていない。

ii) 遺構面の変遷

豊臣期整地前

第1・2地点で遺構が検出されている（第2地点では、この時期の遺構面は調査区南端でのみ調査された）。遺構面のレベルはTP0.6～0.7mであるが、第3地点ではその時期の遺構面がなく、たとえあったとしてもTP0.4～0.6m以下で、そこはややくぼんだ低地であった。〔前田昇1988〕によれば、近代のこの地の地盤沈下は約0.2m以下であるから、実際はもう少し高かったとしても、第3地点の調査時は、湧水により連日のレベルまで冠水したことから察すると、ほぼTP+0.5m程度が、居住の限界であったとみられる。この時期の遺構は1本柱の橋（柱痕跡の直径は0.1m以下）、溝、土壌などであるが、そのいずれもが北で東に25°前後振れる（ないしそれに直交する）豊臣前期の整地以後の地割りと一致している。これは屋敷地の造成以前に、すでにこの地で同じ方向の地割りが成立していたことを示すか、または天正13年(1585)以降のものであるか、という二通りの可能性が指摘されているが、現状では結論が出せない。

豊臣前期の屋敷地造成

豊臣前期のある段階に、この地で最初の屋敷地造成が行われる。この造成は第1地点の北辺に東西36m以上の規模で行われ、現代でも同じ地割りをとる造幣局敷地の西端まで続いていたとすれば、想定最大値は約55mに及ぶ。また第2地点で築かれた石垣の南北幅は約35mを測る。よって屋敷地の最大面積は1,900㎡を越える。この段階では第3地点はまだ低地のままであるが、第6b層の整地層がこれに相当する可能性は皆無ではない。

豊臣後期の屋敷地拡張前

第3地点では詳細不明ながら遺構の存在が確認され、また部分的に炭・灰の薄層が分布している（本書の後期第1段階）。

豊臣後期の第1次屋敷地拡張後

陶磁器編年の後期1の段階に第1地点では屋敷地北辺の大溝SD501が道路SF301に変わり、第2地点では屋敷地が大きく南へ拡張される。この拡張は石垣の南延長線に沿う土壇の造成によっている。この結果、屋敷地の南北規模は45m以上になるが、第3地点の第6a層の整地層がこの造成に該当するとすれば、まだその上面はTP0.9m程度で、第2地点の屋敷地のようなTP1.7~2.0mという高さに比べるとやはり低地であったとせざるをえない。よって、第2地点で拡張された屋敷地内では、全面的な土地造成が行われたわけではなく、外郭のみを土塁状に囲い込んだものかとみられる。その内部の第3地点では耕作が営まれ（本書の後期第2段階）、続いて厩や鍛冶炉SX601が検出される遺構面が変わる（後期第3段階）。SX601の周囲では、覆い屋となる柱穴がみつからないので、ここでは野鍛冶が行われたのであろう。また鉾澤の出土量は少なく、1回限りかそれに近い小鍛冶であらう。

豊臣後期の第2次屋敷地拡張後

豊臣後期のある段階に、第1・2地点では屋敷地の東辺に盛土を3mほど積み足し、敷地を東へ拡張している。第3地点では土壇SX501が造成され、だいたい第1・第2地点と同じ高さになるが、なお東南部は低いままであった（後期第4段階）。SX501の南裾は、この段階で屋敷地内の地境が東西方向であったことを示している。この盛土出土の遺物は第2・3地点とも陶磁器編年の純然たる後期2の段階までは降らない様相であった。

豊臣後期末から徳川初期

第3地点では大坂冬の陣（1614）の焼土層がないため、第4d層上面の生活面とそれを覆う第4c層が冬の陣前後の時期とみられる。ここでは南半部の低地で溝や塀（建物の可能性もある）、土塀などが検出され、土塀には羽口や鉾澤が含まれていた。羽口・鉾澤は多量というほどではないが、この付近で鍛冶が行われたことを示す。この直上の第4cがかなり純然たる炭・灰層で、やはり一定量の鉾澤を含んでいたことは、土壇SX501から集中的に炭・灰が投棄されたためとみられ、豊臣後期第3段階の鍛冶炉と違って、一定の鍛冶場が土壇上に存在した可能性を示唆するものであろう（後期第5段階）。

第1・2地点では前段階の敷地拡張後、大坂冬の陣（1614）を迎え、鍵層となる焼土層が堆積していた。第2地点ではこれと同一とみられる焼土が圓形に入る塀SA851・852が、冬の陣直後の遺構と想定され、また北端のふたつを除いて土塀にも焼土が入っていた。さらにそれから間もなく、その焼土層を覆う最初の整地が第1・第2地点で行われている。肥前磁器を伴わないことから、元和年間（1615~1624）から寛永（1624~1644）初期ぐらい

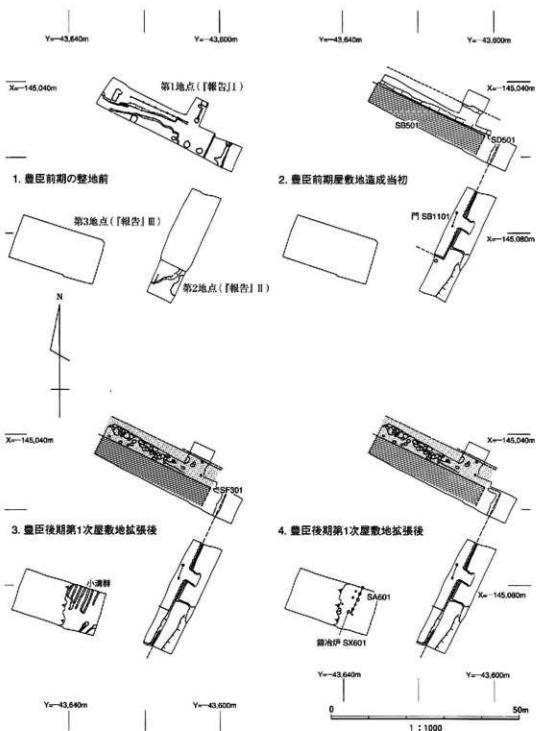


Fig.50 遺構面の変遷図(1)

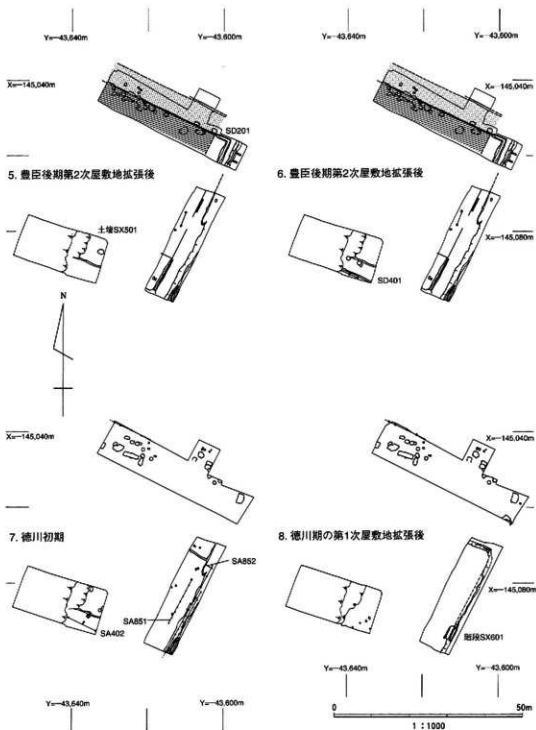


Fig.51 遺構面の変遷図(2)

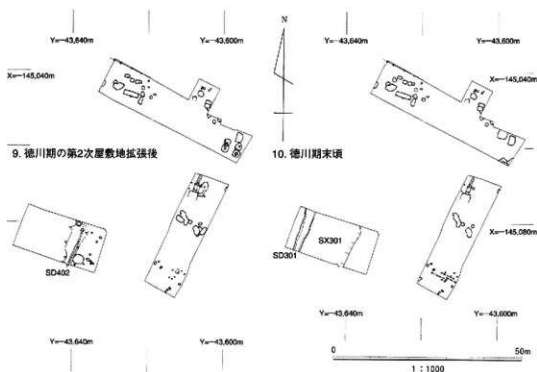


Fig.52 透視面の変遷図(3)

まで〔積山洋1997〕のことで考えられるが、これは大川の方へ向かって行われた整地であった。この第2地点第7層の上面からも3列の塀SA751～753が密接して検出されている。冬の陣以後も、この屋敷地が継続して何らかの形で利用されていたことを示している。

おそらくこのころまでには、第3地点では鍛冶による炭・灰の投棄（第4c層）が停止し、その上面は生活面となって井戸や塀（建物か）、溝などの遺構が登場する。

徳川期の第1次屋敷地拡張

17世紀中ごろまでに第2地点では第6層によって厚い盛土が行われる。これも大川への傾斜面を埋めたもので、その結果、敷地の東端は第2地点の東端近くまで拡大した。これと一連の整地層が第3地点の第4a・b層であり、第4c層上面の塀や井戸を埋めている（井戸から初期肥前磁器が出土）ため、屋敷地の内部まで及ぶ大規模な整地が実施されたことがわかる（徳川期第2段階）。このとき、南の低地を完全に埋めたため第4a層は土壇SX501をも覆うため、それまでの東西方向の地境も失われることになった。

ところで、造幣局の敷地は、徳川期には幕府の材木蔵・材木奉行（のち破損奉行）屋敷が置かれていたが、『報告』Iで示された〔豆谷浩之1995〕ように、材木蔵の設置は遅く

とも明暦3年(1657)とみられる。よってこれらの整地層が、材木蔵の設置に直接関わるものであろう。あらためてその出土遺物をみると、初期肥前磁器の皿(Fig.26-55)や筒形碗(『報告』ⅡのFig.37-149)、内野山系唐津焼の碗(Fig.26-56)、焙烙(Fig.26-63)などは、せいぜい江戸時代第3段階までのものであろう。そのうち、肥前磁器は2点とも大橋福年のⅡ期【大橋康二1989】までにおさまり、1650年代が下限とされていることから、この点は裏付けられる。もっとも、絵図の年代は下限を示すにすぎず、実際の整地がもう少し古く遡ることは充分ありうるが、具体的にはまだ明らかではない。

徳川期の第2次屋敷地拡張

17世紀末か、遅くとも18世紀初頭ごろには、第1地点1b層と第2地点第4層の盛土によって、東へ下がる傾斜地はほぼ完全に平坦地と化し、敷地の東端は調査区のさらに東へ拡大した。第1・3地点ではこれに対応する層準は不明である。

徳川期における地境の変化

拡大を続ける屋敷地の内部において、小区画の地境はいくつかあったことであろうが、第3地点では17世紀前半までは東西方向のものがあった。その後、18世紀のうちに埋またとみられるSD402は、南北方向の地境が出現したことを示している。この地境はのちに掘削された大規模な落込みの東端として継続することになる。

徳川後期の落込みと遺物群

第3地点では、19世紀のある段階に、大規模な落込みSX301が掘削される。その性格については、船入り、貯木場などいくつか考えられるが、いずれも確証はない。なお、落込みの東端を石垣で護岸していた形跡はない。

これを埋立てた整地層が第3層であるが、その出土遺物の様相は下記のとおりである。

①肥前磁器碗は、端反碗が主体で広東碗を含まない。②瀬戸美濃産磁器が多く、碗や小皿は、江戸の和泉伯太藩上屋敷跡【帝都高速度交通営団・地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会1994】で文政6年(1823)の火災とされる焼土層出土品に類例が見られる。③天保年間(1830～1844)以降に流行した淡路の珉平焼【洲本市立淡路文化史料館1989】や、型造りで超薄手の万古系急須・土瓶類【水谷英三1981】が存在する。④明治20年代以降の型紙摺りや銅板転写のものはない。以上から、19世紀前半を中心とし、1870年代ごろまでの年代幅におさまる遺物群であることがわかる。なお、もっとも類似点が多いのは、東京大学医学部付属病院地点AL37-1号遺構【東京大学遺跡調査室1990】の遺物群である。

ところで、この整地層が非常に大規模なものであったことは確かである。よってそのよ

うな大工事の契機としては、明治4年(1871)の新政府による造幣寮開設が想定できようし、事実、その上の第2層は近代(おそらく明治)の層準(Fig.6-7)であることから、妥当な想定であろう。

いまひとつ重要な遺物に、4枚で小判1両(1枚)とされた一分判金244がある。この金貨は元文元年(1736)以後、草書体の「文」字を打った文政一分判金に改鑄されるまでの80年以上流通したものである。これについてはすでに述べた[積山洋1997]ので、ここでは金の品位が規定の約66%であるのに対し、出土した244は約70%であったことだけを指摘するにとどめておく。

造幣局の敷地南部における3次に及んだ発掘調査は、今回をもってひとつの節目を迎えた。今次調査では豊臣期の屋敷地についてあらたな知見を加えるとともに、江戸時代の様相についても、従来以上に多くの資料を得ることができた。この地域が天満本願寺そのものであるか否かは未確定であるが、現状ではより有力な候補であることも、動かなくなったといえよう。江戸時代についても、大坂三郷のひとつとして、天満宮や青物市場でにぎわったこの地の様相が、いずれ明らかになることが期待される。

註)

- 1) [積山洋1995]で示した陶磁器・土師器編年による。
- 2) [大阪市文化財協会1992]図面143-4543などに類例がある。
- 3) [兵庫県・新宿区南町遺跡調査団1994]26号遺構(巻頭図版4右下)などに類例がある。京焼の可能性も否定できない。
- 4) 奈良国立文化財研究所遺物処理研究室の肥塚隆保氏のご教示による。

参 考 文 献

- 伊藤毅1987、「天満の成立」：『近世大阪成立史論』生活史研究所
- 内田九州男1989、「豊臣秀吉の大阪建設」：『よみがえる中世』2 平凡社
- 大阪市文化財協会1988、『大阪城跡』Ⅲ
- 1992、『難波宮址の研究』第九
- 1995、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 1997、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 大阪市都市住宅史編集委員会編1989、『まちに住まう—大阪都市住宅史—』財団法人大阪都市協会
- 大橋康二1989、『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 櫻井成廣1970、『豊臣秀吉の居城 大阪城編』日本城郭資料出版会
- 新宿区内藤町遺跡調査会1993、『江戸のやきものと暮らし』
- 洲本市立淡路文化史料館1989、『珉平焼』(図録)
- 横山洋1995、「近世大阪出土の土師質土器編年、素柄」：『大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要』3 大阪府埋蔵文化財協会
- 横山洋1997、「天満出土の元文一分金」：『華火』66号 大阪市文化財協会
- 横山洋1997、「近世初期大阪の肥前陶磁」：『陶説』532号 日本陶磁学会
- 帝都高速度交通営団・地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会1994、『和泉伯太瀬上原敷跡』
- 東京大学遺跡調査室1990、『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点』
- 兵庫県・新宿区南町遺跡調査団1994、『南町遺跡』
- 前田昇1988、「大阪の自然と居住空間」：『新修大阪市史』第1巻 大阪市
- 豆谷浩之1995、「文献史料からみた天満本願寺」：『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅰ 大阪市文化財協会
- 水谷英三1981、「伊勢のやきもの」：『日本やきもの集成』6 平凡社
- 森毅1992、「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」：『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会
- 1995A、「天満本願寺跡出土陶磁器の検討」：『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅰ 大阪市文化財協会
- 1995B、「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通—大阪の資料を中心に—」：『ヒストリア』149号 大阪歴史学会
- 1997、「城下町大阪における唐津焼出現期の様相」：『陶説』532号 日本陶磁学会
- 吉井克信1996、「戦国・中近世移行期における大阪本願寺の呼称—「石山」表現をめぐって—」：『ヒストリア』153号 大阪歴史学会
- 渡辺誠1985、『焼埴』：『講座・日本技術の社会史』第二巻 日本評論社

あ　と　が　き

大蔵省造幣局の敷地(大阪市北区天満1丁目)における発掘調査は、1996年度には3次を数えるにいたった。本書はその報告書の三冊目であるが、これまで報告した豊臣期の屋敷地の内部における調査結果を報告したものである。

1993・1995年度の各調査では、豊臣前期に造成された屋敷地の北辺と東辺の様相を確認していた。今回の調査地は、この屋敷地の内部にあたるが、北辺や東辺に比べて土地造成が行われるのがかなり遅れ、豊臣後期までくだること、また内部では炉跡などがみつき、金属器の生産が行われていたらしいことなど、重要な知見を加えることができた。さらに、これまで以上に徳川期に関する情報も増加した。これによって、屋敷地内の構造が次第に明らかとなり、また城下町天満の歴史像も豊かなものになってきた。

天満本願寺所在地の有力候補である造幣局の敷地では、官舎の建替に伴う発掘調査は今回をもってひと区切りつけることとなった。この限りでは、確かにこの地に本願寺が存在したとまで言えるには至っていない。とはいえ、天満の地に継続して発掘調査のメスが入った意義は大きく、将来につながるところもまた大であろう。本書が、今後の城下町天満の研究に大きく寄与することを願うものである。

(永島暉臣愼)

索引

い	石山本願寺	6,9	羽口	20,21,26,58,62
	一分割金	2,43,53,67	破損奉行	5,65
	伊藤紋	4	万古	43,57,66
	色絵	37,42,53	ほ 本願寺	1,3,4,6,9,67
う	内田九州男	4	み 張平焼	42,53,66
お	大坂三郷	5,9,67	め 銘	42,43,53,57
	大坂冬の陣	1,5,9,13,21,23,27,60,62		
	大橋康二	66		
	音羽	57		
か	瓦器	6,14,17		
	鍛冶	19,20,58,59,62,65		
こ	鯉澤	13,20,26,27,29,59,62		
	耕作地	58,59		
	刻印	11,43,57		
	米蔵	5		
さ	材木蔵	5,65,66		
	材木奉行	5,65		
	三田	42,53,57		
し	志土呂	42,43		
す	硯	30,53		
	砂目	23,29,30,58		
ち	茶入れ	43		
	中世	6,14,17,29,60		
つ	壺屋	43		
て	天神橋遺跡	6		
	天満堀川	4		
	天満森	3		
と	砥石	23,53		
	豊臣後期 1	58,59,62		
	豊臣秀吉	4		
な	軟質施釉陶器	42,43,57		
は	萩焼	57		

Archaeological Reports
of
Tenma-Honganji Temple Site in Osaka, Japan

Volume III

A Report of the Excavation
Prior to the Development of
the Tenma Area in the Osaka Castle downtown site in 1996

March 1998

Osaka City Cultural Properties Association

CONTENTS

Preface	
Explanatory notes	
Chapter I Progress and outline of research	1
Chapter II A history of the Tenma area of the Castle downtown and excavation research	3
S.1 Development of the Tenma area of the Castle downtown	3
S.2 Results of previous excavations at the Mint	6
Chapter III Results of research	11
S.1 Stratigraphy	11
S.2 Features and artefacts of the Toyotomi Period (AD1580-1615)	15
1.The first stage of the late Toyotomi Period	15
i. Features	15
ii. Artefacts	17
2.The second stage of the late Toyotomi Period	17
i. Features	17
ii. Artefacts	17
3.The third stage of the late Toyotomi Period	19
i. Features	19
ii. Artefacts	20
4.The fourth stage of the late Toyotomi Period	21
i. Features	21
ii. Artefacts	23
5.The fifth stage of the late Toyotomi Period	23
i. Features	23
ii. Artefacts	26
S.3 Features and artefacts of the Tokugawa Period (AD1615-1868)	27
1.The first stage of the Tokugawa Period	27
i. Features	27
ii. Artefacts	29
2.The second stage of the Tokugawa Period	29
i. Features	30
ii. Artefacts	30
3.The third stage of the Tokugawa Period	35
i. Features and artefacts	35
4.The fourth stage of the Tokugawa Period	36
i. Features	36
ii. Artefacts	37

S.4 Conclusion	58
1.Changes in the features at the current site	58
2.Changes in the features in the southern area of the Mint	60
i. Stratigraphic relationships	60
ii. Changes in the feature levels	61
References	68
Postscript	
Index	
English contents	
Reference card	

報告書抄録

ふりがな	てんまほんがんじあとはくつちようさほうこく3						
書名	天満本願寺跡発掘調査報告Ⅲ						
副書名							
巻次	Ⅲ						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	積山洋						
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会						
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 Tel 06-943-6833						
発行年月日	西暦 1988年 3月 17日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
てんまほんがんじ 天満本願寺	おおさかふのおきかしきたく 大阪府大阪市北区 てんまいっちようめ 天満1丁目	27127	34度 41分 28秒	135度 31分 25秒	960808 ～ 961016	330	造幣局地下 貯留槽建設 に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
天満本願寺	城下町	豊臣	耕作地跡 炉跡 堀・土壇	陶磁器・羽口・鉾 滓・石製品		豊臣期城下町の屋 敷地内部の様相が 判明	
	城下町	徳川	堀 溝 井戸 土壇	陶磁器・羽口・鉾 滓・石製品・金貨			

原色図版



豊臣後期～徳川初期の遺構
(南から)



豊臣後期の遺構 (西から)



(表)



(裏)

元文一分判金
(約2倍)



各地産の磁器



各種の陶器

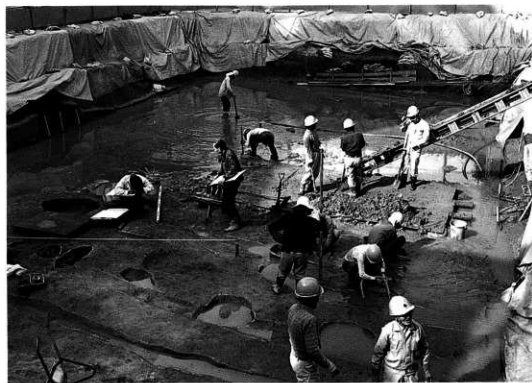


各種の陶器

図 版



調査地と大阪城・大川（南から）



湧水の中での調査風景（東から）



TN93-3次調査区全景（東から 中央礎石列が^aSB501、溝が^aSD501）



TN95-3次調査区の石垣と出入り口部（北東から）



第6a層以下の地層（深掘りトレンチ）



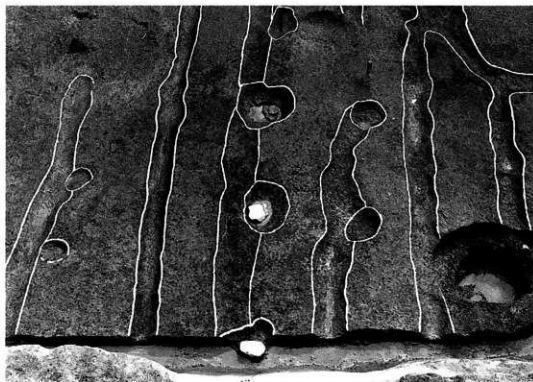
第6b層上面の炭・灰の堆積（東から）



第6b層上面 炭・灰からの遺物出土状態



第6a層上面 全景（西から）



第6a層上面 北半部（北から）



第6a層上面 南半部（北から）

図版六 豊臣後期第3段階の遺構



SA601の南半部（東から）



SA601の北半部（南から）



SA601 SP601 (西から)



SA601 SP602 (西から)



SA601 SP603 (西から)

図版八 豊臣後期第3段階の遺構



SX601検出当初（南から）



SX601掘下げ中（北から）



SX601断割り状態（西から）



第4d層基底面の遺構検出状態（西から）

図版十 豊臣後期第4段階の遺構



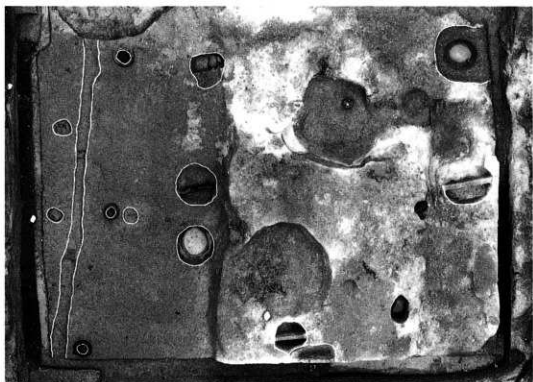
東壁 SX501と第4層の地層断面（手前はSD501）



北壁 SX501の地層断面



北東隅 第5b層上面のくぼみ（北から）



第5a～4c層上面 全景



全景（西から）



全景（南から）



SK401 (西から)



SK402 (西から)



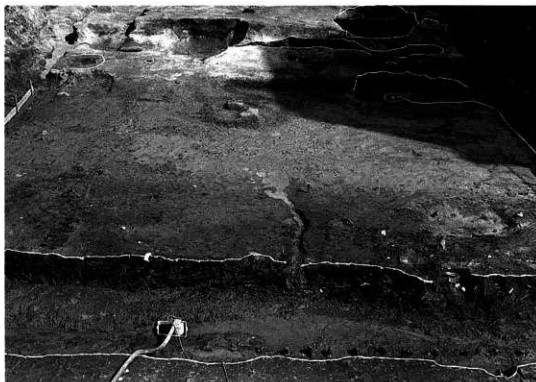
SE401 (南から)



北壁 SX301の地層断面



徳川期第3・第4段階 全景



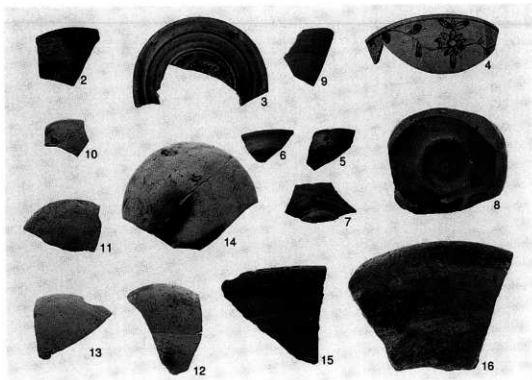
徳川期第3・第4段階 全景（西から）



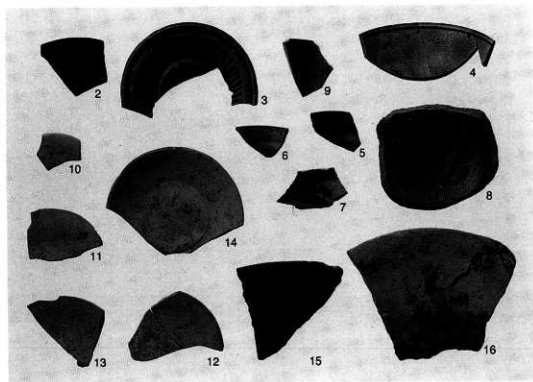
SD402他 検出状態（南から）



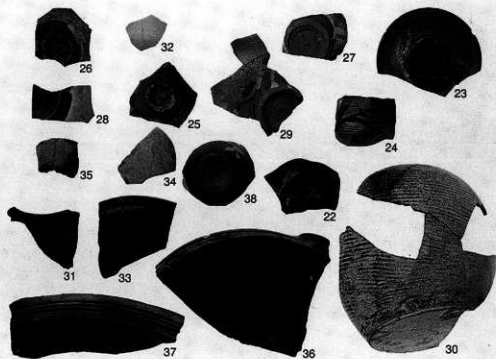
北壁 SD301の地層断面



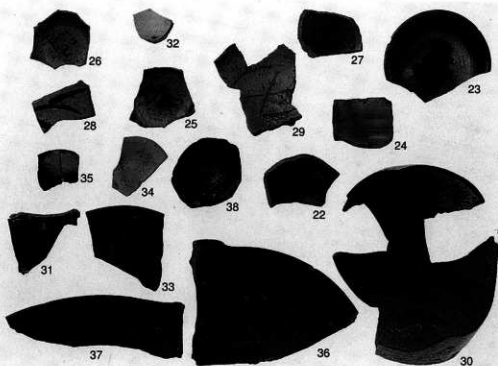
2 (第6b層)、3・4 (第6b層上面)、その他は第6a層



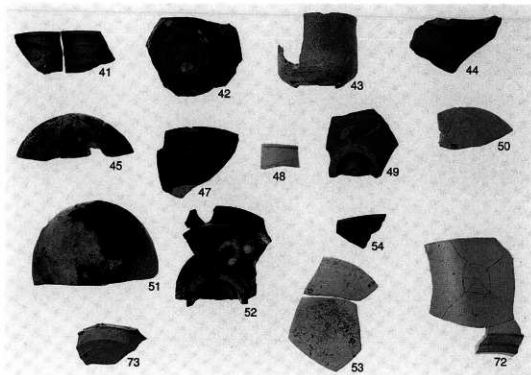
2 (第6b層)、3・4 (第6b層上面)、その他は第6a層



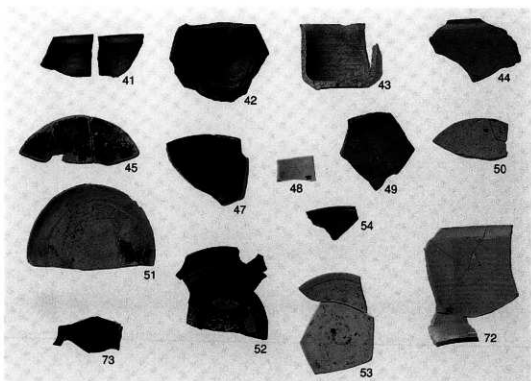
38 (SK501)、その他は第5層



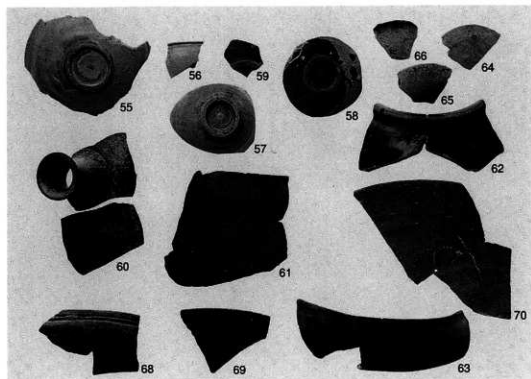
38 (SK501)、その他は第5層



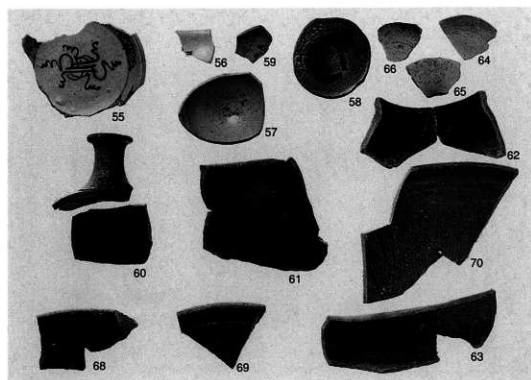
41~43・45(第4d層)、44(SK402)、47~51(SE401)、52・53(SK404)、54(第4c層)、72(SD402)、73(SK408)



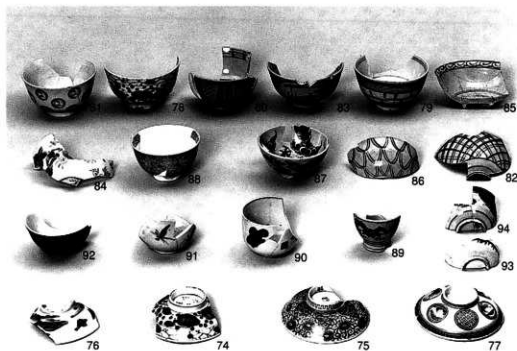
41~43・45(第4d層)、44(SK402)、47~51(SE401)、52・53(SK404)、54(第4c層)、72(SD402)、73(SK408)



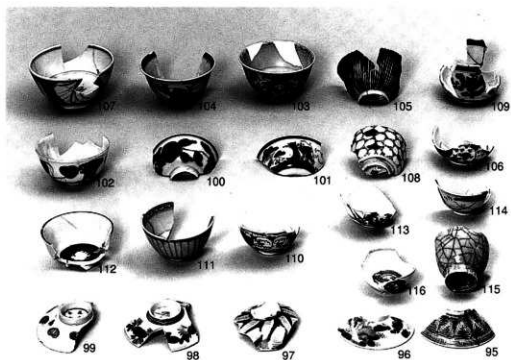
第4a層



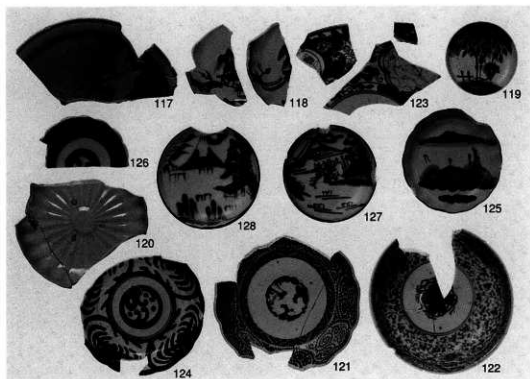
第4a層



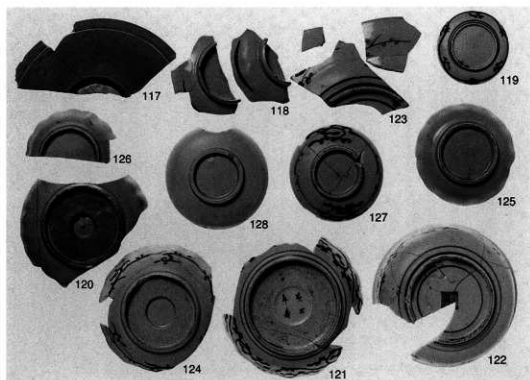
磁器碗（肥前系）



磁器碗（瀬戸美濃産、その他）



磁器皿 (125～128は瀬戸美濃産、他は肥前系)



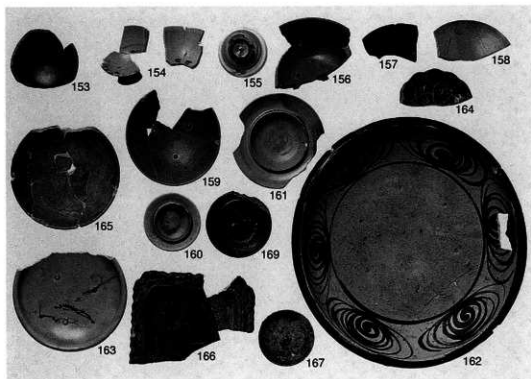
磁器皿 (125～128は瀬戸美濃産、他は肥前系)



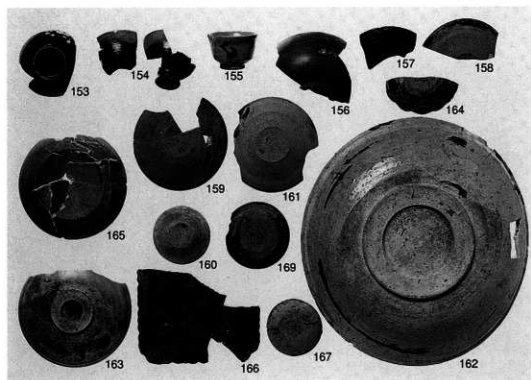
その他の磁器 (141～143は瀬戸美濃産、144～147・150・151は三田系、152は淡路産)



陶器土瓶・急須類



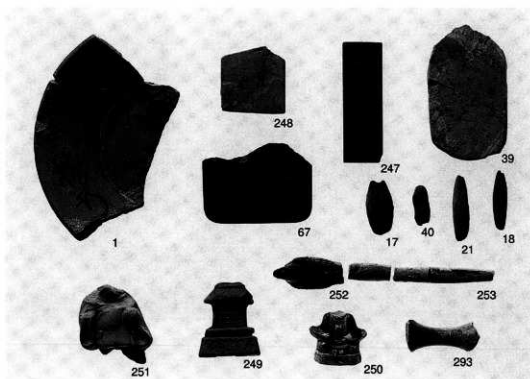
陶器碗皿類



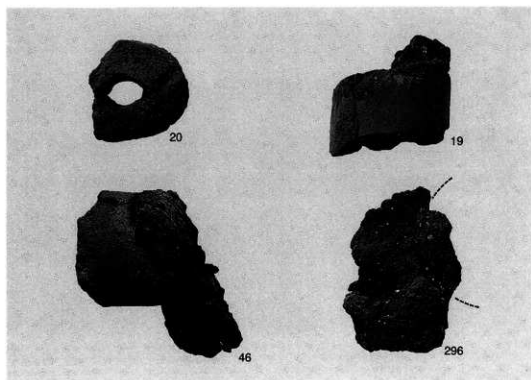
陶器碗皿類



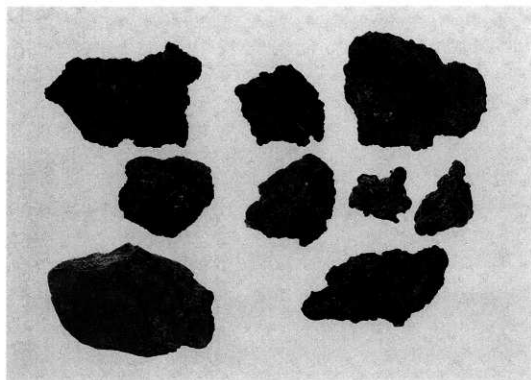
第3層出土 その他の陶器・土質土器



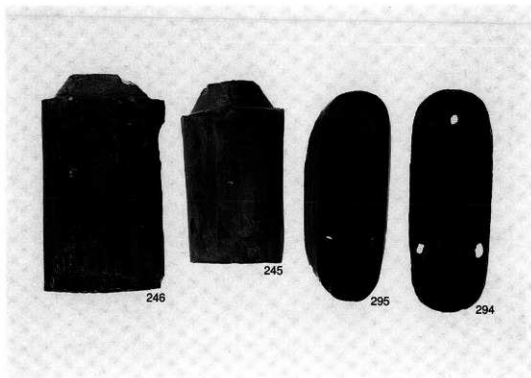
1(第2層)、17・18(第6a層)、21(SX601)、39・40(第5層)、67(第4a層)、247～253・293(第3層)



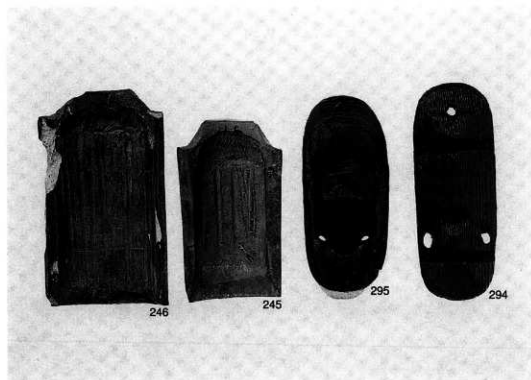
羽口：19・20 (SX601)、46・296 (SK401)



楕形澤と焼けた石 (SK401)



瓦：245・246（第3層）、下駄：294（第3層）、295（SD301）



瓦：245・246（第3層）、下駄：294（第3層）、295（SD301）

大阪市北区 天満本願寺跡発掘調査報告Ⅲ

I S B N 4 - 9 0 0 6 8 7 - 2 2 - 7

1998年3月17日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL 06-943-6833 FAX 06-920-2272)

印刷・製本 ナニワ印刷株式会社

〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19

Archaeological Reports
of
Tenma-Honganji Temple Site in Osaka, Japan

Volume III

A Report of the Excavation
Prior to the Development of
the Tenma Area in the Osaka Castle downtown site in 1996

March 1998

Osaka City Cultural Properties Association

Archaeological Reports
of
Tenma-Honganji Temple Site in Osaka, Japan

Volume Ⅲ

A Report of the Excavation
Prior to the Development of
the Tenma Area in the Osaka Castle downtown site in 1996

March 1998

Osaka City Cultural Properties Association